

# 上ノ平城跡

2001年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

# 上ノ平城跡

2001年

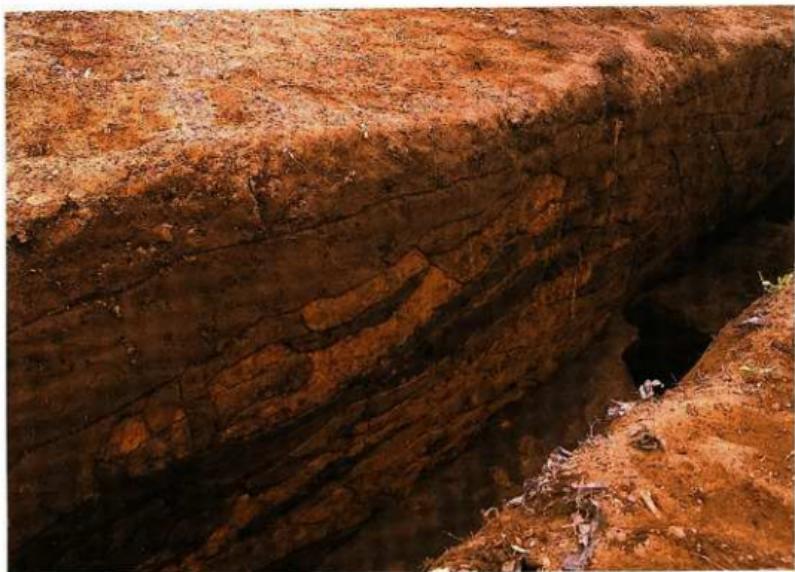
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会



上ノ平城跡と南小河内集落



二の堀（8トレンチ）



主郭土塁（14トレンチ）



出入口礎構（15トレンチ）

## 序

箕輪町は、伊那谷の北部、歴史の古い蔭原の里にあり、南北に連なる東西の山々と、そこから流れる中小河川、そしてそれらが流れ込む天竜川によって形成された、扇状地や河岸段丘などによる複雑な地形が織りなす、水と緑の自然あふれる美しい所です。遙か先史の頃より、川や湧水などの水辺には、魚や獸などの食料を求めて人々が暮らし始め、そして先人たちの長年にわたる努力の積み重ねによって、今日の箕輪町へと発展してきました。町内には、その証ともいえる、歴史と文化を今に伝える数多くの文化遺産があります。

今回調査を行いました上ノ平城跡は、町内でも数多くの遺跡が存在する、天竜川左岸の山麓に位置し、地域の皆さんにより、今まで大切に伝えられてきました。そして昭和44年には長野県史跡に指定され、箕輪町を代表する城跡の一つとして、今日に至っています。

この度、地元南小河内区の皆さんにより、地域の歴史を大切に伝えていくための場所として城跡を活用するべく、城跡活性化委員会が組織され、今後の整備・活用を検討していくこととなりました。今回の調査報告書は、これに先立ちまして、城跡の内容を少しでも正確に理解するために行った、試掘調査の結果であり、城跡の歴史を考えるうえで、貴重な資料を得ることができました。そして、それと共に、今まで破壊されることなく伝えられてきた城跡の大切さを、改めて痛感することができました。

今回の調査は、城跡の一部を調査したのみであることから、明らかになった情報には限界があり、今後さらに検討していくことが必要であると思いますが、調査で得ることができた情報を、できる限り記したつもりであります。この資料が、今後多くの皆様に広く活用され、城跡の歴史を解明するための、又、今後の整備・活用のための資料になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の事業に際しまして、多大なるご理解とご協力をいただきました地元南小河内区の皆様をはじめ、ご指導いただきました先生方、そして寒い中をご尽力いただきました調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長 大根武治

## 例　　言

- 1 本書は、平成11～12年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪2,831番地他に所在する、上ノ平城跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成11・12年度に、町が国庫補助金、県費補助金の交付を得て行った。
- 3 本調査に係わるすべての業務は、箕輪町教育委員会が行った。
- 4 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。  
遺物の洗浄・注記－井沢はずき、金沢 蘭、柴チエ子、宮下容子  
遺物の接合・復元－金沢 蘭、福沢幸一  
遺構図の整理・トレース－金沢 蘭、根橋とし子  
遺物の実測・トレース－伊藤敏明、金沢 蘭  
挿図作成－池上賢司、金沢 蘭、根橋とし子  
写真撮影・図版作成－赤松 茂、池上賢司、柴 秀毅
- 5 本書の執筆は、第1章第2節を松島信幸、寺平 宏が、その他を柴 秀毅、根橋とし子が行った。
- 6 本書の総括については、河西克造氏より玉稿（付編）を賜った。
- 7 本書の編集は、柴 秀毅、根橋とし子、池上賢司、金沢 蘭、福沢幸一が行った。
- 8 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。
- 9 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。  
個人－井沢行正、市川隆之、伊藤 修、飯塚政美、大槻貞男、大槻裕男、大槻高章、小口良雄、丸山浩隆、河西克造、金沢阿鶴、倉沢敏一、小池 孝、笹本正治、寺平 宏、福島 永、測井英宏、松島信幸  
機関－南小河内区、上ノ平城跡地域活性化事業委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター、長野県教育委員会

## 凡　　例

- 1 挿図の縮尺率は、各図の右角またはスケールに表示してある。
- 2 遺物の実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。  
土器実測図－1：4　　鉄器実測図－1：2
- 3 土層及び土器の色調は、『新版 標準十色帖』を用いて記してある。
- 4 土器実測図における土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。
- 5 土器実測図におけるスクリーントーン表示は、以下のものを表す。  
・・・陶器断面      ・・・磁器断面
- 6 出出土器観察表の単位はセンチメートル(cm)である。また、現存する数値は「( )」で、計測不能は「-」で表している。
- 7 鉄器実測図におけるスクリーントーン表示は、以下のものを表す。  
・・・土器付着痕
- 8 出出土金属器観察表の法量は、「長さ・幅・厚さ」の順に記し、単位はセンチメートル(cm)である。重量の単位はグラム(g)で表している。ともに現存する数値は「( )」で、計測不能は「-」で表している。
- 10 遺物観察表における表示は以下のものを示す。  
T=トレンチ G=グリット ST=サブトレンチ H=表採
- 9 図版の出土遺物の数字は、挿図における遺物番号を表す。

# 本文目次

巻頭図版

序

例言・凡例

本文目次

挿図目次・表目次・図版目次

第Ⅰ章 遺跡の概観.....	1
第1節 位置と環境.....	1
第2節 地形と地質.....	2
第3節 城跡の概要.....	9
第Ⅱ章 調査の経緯と経過.....	12
第1節 調査に至る経過.....	12
第2節 調査概要と調査体制.....	13
第3節 調査経過(調査日誌から).....	13
第Ⅲ章 調査結果.....	15
第1節 調査の方法と結果概要.....	15
第2節 遺跡の層序.....	17
第Ⅳ章 遺構と遺物.....	18
第1節 主郭の遺構と遺物.....	18
第2節 その他の遺構と遺物.....	28
第Ⅴ章 まとめ.....	33
付 編 上ノ平城跡の変遷と虎口の破壊.....	37
図 版	
報告書抄録	

## 挿図目次

- |                          |                                 |
|--------------------------|---------------------------------|
| 第1図 調査位置図                | 第15図 15トレンチ平面図、礎石投影図            |
| 第2図 上ノ平城跡とその周辺の地形地質      | 第16図 ①、③、⑤トレンチ土層断面図、③トレンチ拡張区平面図 |
| 第3図 上ノ平城跡面の表層地質柱状図       | 第17図 出土中世焼物実測図1                 |
| 第4図 周辺遺跡分布図              | 第18図 出土中世焼物実測図2                 |
| 第5図 上ノ平城跡平面図             | 第19図 出土金属製品実測図、銭貨拓影図            |
| 第6図 トレンチ設定図              | 第20図 10・11トレンチ土層断面図、トレンチ設定図     |
| 第7図 基本層序図                | 第21図 昼出遺物等実測図                   |
| 第8図 12・13・5・6トレンチ土層断面図   | 第22図 上ノ平城跡現状測量図                 |
| 第9図 集石1実測図               | 第23図 主郭の断面模式図                   |
| 第10図 平石実測図               | 第24図 埋没土壘の土層断面図                 |
| 第11図 14トレンチ土層断面図、遺物出土状況  | 第25図 主郭虎口の破壊                    |
| 第12図 集石2実測図              | 第26図 主郭部の変遷                     |
| 第13図 集石3実測図              |                                 |
| 第14図 1～4、7～9、15トレンチ土層断面図 |                                 |

## 表 目 次

- |                    |                |
|--------------------|----------------|
| 第1表 上ノ平城跡のテフラ等分析結果 | 第4表 出土陶器・磁器観察表 |
| 第2表 周辺遺跡一覧表        | 第5表 出土金属製品観察表  |
| 第3表 出土土器観察表        | 第6表 出土銭貨観察表    |

## 図版目次

- |  |  |
|--|--|
| 巻頭カラー図版1 上ノ平城跡と南小河内集落、二の堀（8トレンチ）             |  |
| 巻頭カラー図版2 主郭土壘（14トレンチ）、出入口遺構（15トレンチ）          |  |
| 図版1 1・2・3・4・5・6・10・11トレンチ土層断面                |  |
| 図版2 12・13・14・15トレンチ土層断面、主郭調査地、主郭南側調査地、四の堀調査地 |  |
| 図版3 二の堀土層断面（7・8・9トレンチ）                       |  |
| 図版4 主郭土壘（1・3・14トレンチ）                         |  |
| 図版5 主郭出入口付近石出土状況（2・15トレンチ）、二の堀石出土状況（8トレンチ）   |  |
| 図版6 集石1、集石2、集石3、地下式坑、平石、礎石建物址、集石群1、集石群2      |  |
| 図版7 出土中世遺物（在地産土器等、国内搬入陶器）                    |  |
| 図版8 出土中世遺物（輸入磁器）出土金属製品・銭貨                    |  |

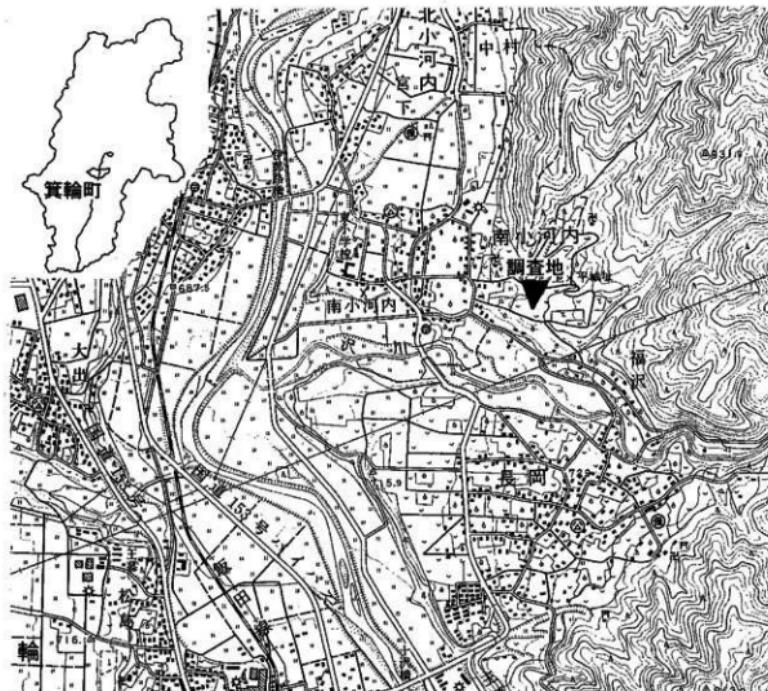
# 第Ⅰ章 遺跡の概観

## 第1節 位置と環境

箕輪町は、西は木曽山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北部に位置し、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。その両岸は河岸段丘と数多くの扇状地とが独特の地形を造り出している。

上ノ平城跡のある南小河内区は、天竜川左岸段丘上、東方の山麓から流れる沢川によって形成された扇状地に位置している。城跡は南小河内区の東方、東の山裾から西方に延びた丘陵上に立地し、北緯約 $35^{\circ} 55' 42''$ 、東経約 $138^{\circ} 00' 15''$ の地点で標高746.9mに位置する。

北東は尾根続きに山へと至るが、東方は寺沢川の断崖で断たれている。南方及び西方は視界がひらけ、眼下には諏訪・高遠方面へと続く沢川沿いの道を、また、遠くには天竜川西岸や伊那・下伊那方面を見渡すことができる。北は知久沢を挟んで段丘があり、尾根沿いに東の山へと続いている。昔からの集落は、主に城跡西側に南小河内集落が、城跡南側の沢川沿いに福沢集落が位置しており、城跡は集落より一段高い丘陵上にある。現在は、断崖部を除いたほとんどが畑・果樹園となっている。



第1図 調査位置図 (1 : 20,000)

## 第2節 地形と地質

### 1 上ノ平城跡の地形

笑輪町の竜東側には守屋山（1650m）を初めとする伊那山脈の主稜線からの水を集めて流れてくる沢川が天竜川に合流している。沢川の左岸側には広い長岡地区的扇状地（以下、長岡扇状地とする）が発達している。竜東から望見すると天竜川に面している長岡扇状地の西端部分が侵食されて、比高30mの連続性のよい段丘崖が見える。

上ノ平城跡は沢川の右岸の南小河内地区にある。右岸側に発達する沢川の扇状地は長岡扇状地に比較してずっと小規模で標高も低い。ところが、低い扇状地の上に高い段丘状の地形が見えている。そこが上ノ平城跡である。少し近づいて見ると、高い段丘状地形は上ノ平城跡面と普濟寺が建っている段丘面とに識別できる。これらの段丘を遠望したとき、周辺の地形より高いことから古い段丘であることがわかる。

上ノ平城跡面は沢川の支流にあたる寺沢川がつくった扇状地で、南端側が沢川で侵食されて段丘状の地形になっている。面の標高は西側の末端部で740m、東側の扇頂部で790mである。天竜川の標高は680mであるから、天竜川からの比高は60mである。沢川からの比高は40m～50mである。

上ノ平城跡は周囲から一段高い馬の背状の台地を利用している。成因は扇状地侵食段丘である。寺沢川が沢川に向かって押し出した扇状地が最初にあり、扇状地形成後、広域に隆起して南東から南側を寺沢川・沢川に、北側を知久沢に侵食されてできた段丘地形である。

### 2 上ノ平城跡面の表層の地質

#### (1) A地点(★1)の地質

県史跡上ノ平城跡に指定されているほぼ中央に深い空堀がある。その北端部は段丘面から深さ10mまで掘り込まれている。この空堀は扇状地上部の山麓から人工の水路で水を流してきて掘削している。この壁面の一部が平成11年の集中豪雨で崩落したため、そこを利用して城跡面を構成している表層の地質を観察した（第2図中の★1地点）。しかし、この地点では最上部の1.5m余が観察できない。これを補うため、観察地点から160m東へ移動した地点にある過去に崩落した壁面を観察し、A地点の不足を補った（第2図の★2地点）。

第2図の★1をA地点、★2をB地点とする。2地点から得られた露頭柱状図（第3図）、試料分析表（第1表）、露頭写真などから表層地質を説明する。

A地点では下部に現れている扇状地礫層を除いて6m余の厚さでテフラ層があり、部分的に砂・礫を挟んでいる。地層説明を上位から下位へおこなう。

(1) 0-160cmまでは褐色火山灰土。最上部の10cmに広域テフラ始良Tn火山灰（以下ATと記す、南九州の始良カルデラの噴火によって降下した火山ガラスで2.5～2.8万年前）が僅かに混じる。ATが降下したときの層準はこれより上になる。全体に含まれる鉱物・岩片は火山結晶が主で、特に、オリビンとコーカス状火山岩片が目立つことから新期御嶽火山活動期の上部テフラにあたる。

(2) 160-180cmの部分に厚さ約20cmで角礫層が狭まる。礫径は3～10cm大、礫種は片麻岩で、遠距離を運ばれていないから寺沢川からの礫である。火山灰土中に挟まれることから寒冷気候下に発生したソリフラクションによって移動してきたと推定している。

(3) 180-260cmの部分は褐色火山灰土である。180cmの部分に赤褐色スコリアがレンズ状にはいる。なお、上記の角礫層を挟む150-190cmの間の褐色火山灰土は80-90%基盤岩の風化岩片からなるの

で全体が再堆積性の地層である。2.4~2.6mの間の褐色火山灰土中には赤色スコリアが散在する。このスコリアは直下の三岳スコリアから混じったものである。

(4) 260-300cmは厚さ約40cmの三岳スコリアで、特有の濃い赤褐色を呈しているから、露頭全体の中では一番目立つ地層である。スコリア粒の径は0.7-1.0cmで、最大粒径は2cmである。新期御嶽上部テフラの中では最も大規模な噴火を示す降下スコリアである。

(5) 300-340cmは濃褐色火山灰土である。火山鉱物にオリビンと、コーカス状火山岩片を含んでいて、ここまで地層が新期御嶽上部テフラである。

(6) 340-410cmの火山灰土からは新期御嶽下部テフラになる。上部は灰褐色、下部はベージュ色を呈しており、下部テフラの色調は全体に白っぽい。これは白~灰色火山岩片が多く含まれるためである。下部テフラが珪長質のマグマに特徴づけられるためである。

(7) 410-470cmは灰褐色土に黄色軽石が混じる。最下部の約10cmは風化岩片を主とする黒灰色砂質土で、黄色軽石が点在している。全体に混じっている黄色軽石は、直下にある辰野軽石から再堆積したものである。

(8) 470-540cmは黄白色の辰野軽石である。層厚が70cmあって、模式地の辰野荒神山より勝っている。470-480cm間では逆級化が認められ、最下部は細粒のため灰色の線状に見える。480-490cmでは軽石粒径が0.2-1.0cm、490-500cmの粒径は1.0-2.0で粗粒、500-520cmは0.2-2.0cmの粒径の逆級化している。520-540cmは粒径0.2-0.3cmの細粒を示す。以上のように逆級化層の積み重なりから、御嶽山の大規模噴火に伴う一連の激しい降下軽石層である。

(9) 540-600cmは灰褐色土で含まれる。火山岩片は奈川軽石と推定できる。557-560cmに厚さ3-4cmの灰色部を、570-572cmに厚さ2cmの青灰色部を挟んでいる。

(10) 600-620cmは厚さ20cmの伊那軽石である。ここでは伊那市以南と違って伊那軽石層が薄く、それとは対照的に辰野軽石層が厚く降下しているのが興味深い。伊那軽石は上部15cmが橙色で下部5cmは白色で粘土化しており黒雲母・バーミキュライトを含む。

(11) 620-625cmは灰黒色砂層である。砂粒が火山起源でなく基盤岩風化物である。したがって上ノ平城跡の離水直後に伊那軽石が降下している。伊那谷の段丘面では伊那軽石から載せてくる地形面はごく稀である。

(12) 625cmより下部は礫層である。亜角礫~角礫で砂岩・粘板岩を源岩とするホルンヘルストと花崗岩である。花崗岩は高達花崗岩で円礫となる。平均礫径は10cmでスケッチ部分に一個であるが礫径40cmの花崗岩巨礫が入っていた。礫層は下へ厚く連続する。寺沢川から供給された扇状地礫層である。

## (2) B地点(★2)の地質

上ノ平城跡の最上部での地表観察を、同じく過去崩落があったと思われるB地点(第2図の★2)で行った。地表から1.5mの深さまでの観察である。

(1) 0-30cmが最上部を占める黒土である。広域テフラのATと鬼界アカホヤ火山灰(以下K-Ahと記す。南九州鬼会カルデラの噴火によって飛来した火山ガラス、7,300年前)を含む。K-Ahに特有の褐色ガラスは20-30cmに多い。黒色の構成粒子は御嶽上部テフラ起源の火山結晶が主体である。若干の基盤岩由来の風化岩片も含む。以上から再堆積性の風成層であることがわかる。

(2) 30-70cmは褐色火山灰土である。この中で、30-40cm層準にAT火山ガラスが集中している。ATの降下層準(2.5-2.8万年前)と推定できる。ATは70cmまで混入している。御嶽起源の火山結晶も最大の含有量を示す。

(3) 70-140cmは褐色火山灰土である。火山結晶のオリビンやコーカス状火山岩片などを含むため御嶽上部テフラ起源のテフラ層である。90-100cmの層準に赤色スコリアをやや多く混入している。

70-140層の上部の層準がA地点（★1）の最上部に対比できると考える。分析結果から、両者と共に通する要素が認められるためである。その結果、上ノ平面の最上部に礫層を覆って被覆するテフラ層の厚さは7mである。

### 3 南小河内の地形発達

#### （1）東箕輪地区の地形概要

沢川は箕輪町竜東地域で最大の河川であって、天竜川へ合流する沢川の末端部は、竜東地域では最大の平坦な地形が広がっている東箕輪地区である。沢川の左岸側が長岡、右岸側が南小河内で、本調査地の上ノ平城跡は右岸側に位置する（第2図）。

長岡地区は沢川の扇状地が侵食されて段丘地形になっている。これに対して、南小河内地区の地形は複雑で、沢川の右岸へ合流する支流の寺沢川と知久沢とが造り出している扇状地である。二つの支流が造り出す地形は、末端部の南側では沢川の影響を受け、北側では天竜川の影響を受けている。

沢川を境に右岸と左岸の地形の発達状況と形成史は異なっている。その原因は左岸が沢川による大規模扇状地であるのに、右岸は寺沢川と知久沢による小規模扇状地であるためである。沢川の扇状地涵養域は広大で、寺沢川と知久沢の扇状地涵養域は小規模であることが発達状況や形成史の違いになっている。

#### （2）上ノ平城跡面の形成

上ノ平城跡面は南小河内地区で一番高い段丘状の地形をつくっている。寺沢川が沢川に合流するところにできた扇状地である。その形成時期は伊那軽石の前である。構成する地層は角礫層で供給地が近いことを示している。伊那軽石層を載せる扇状地面は伊那市西方の横山で知られているものの、伊那谷ではほとんど例のない地形面である。横山では伊那軽石の下位に厚い礫層の押し出しが見られる。伊那軽石の噴出年代は約9.5万年より少し後であると推定でき、酸素同位体ステージの5c～5bにできた扇状地であると考えている。

上ノ平城跡面は、扇状地形成後に沢川・寺沢川・知久沢によって周りが侵食されて、現在みられるような馬の背状の段丘地形になった。周囲を崖に囲まれた、こうした地形を築城者は天然の要害として利用したと想像できる。

#### （3）南小河内地区の地形形成

上ノ平城跡の北に隣接して普济寺が建つ段丘がある。面上の堆積物が確認できなかったが、標高が上ノ平城跡面と同じだから、同時期の段丘であろう。この段丘をつくっている砂礫層は寺へ上の坂道で観察できる。礫・砂・粘土からなり、礫は円礫で淘汰されているから天竜川から供給された礫を含むと考える。

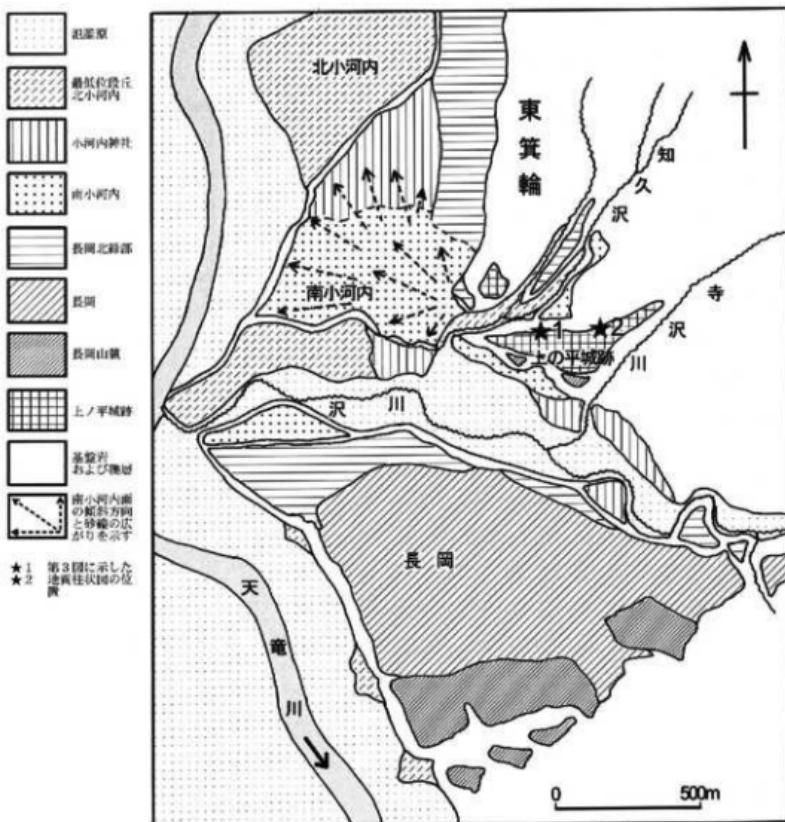
小河内の集落と箕輪東小学校のある段丘は知久沢によってできた扇状地である。扇状地面上にはテフラの堆積を見ない。その表層の堆積物からすると2～3万年前の最終氷期後半の酸素同位体ステージ2に形成された扇状地である。知久沢はそれほど大きくななく、大量の砂礫を運び出せる川ではない。しかし、ステージ2の寒冷な氷期には、知久沢といえども上流域は古式部城址山（1120.3m）をはじめとする1000m以上の稜線に囲まれているから、氷期には現在と大きく異なる環境で岩屑の生産が著しかったであろう。知久沢の下流部には右岸に発達する沖積面より一段高い段丘や、左岸の日輪寺の段丘などが残っていて、当時の砂礫の押し出しが盛んだったことを示している。

#### (4) 長岡地区的地形発達

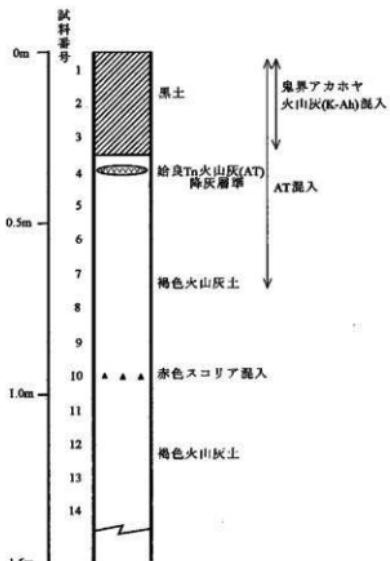
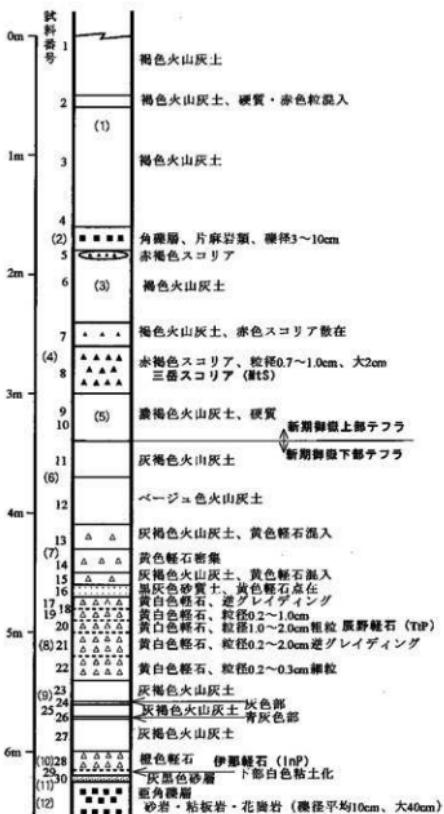
長岡地区は沢川の扇状地侵食段丘である。沢川は奥が深く、広い流域面積をもっている。天童川まで運び出してくる砂礫の搬出量は大きい。一番広い長岡面には御嶽山の最上部テフラが載っている。これから、長岡扇状地の土形成期は最終氷期の前半にあたる酸素同位体ステージ4にあたる。この時期は伊那谷の盆地内でも竜東・竜西とともに広く扇状地の発達が見られる。同じ、上伊那の竜東では三峰川扇状地の富県地区が同じ時期の扇状地にあたる。長岡扇状地をつくっている疊層にはさらに古い時期のものがあるかも知れない。

長岡扇状地は沢川の左岸で天童川に向かって突き出ている。この部分はテフラを載せない新しい段丘が重なっている。

(松島信幸・寺平 宏)



第2図 上ノ平城跡とその周辺の地形地質 (1:15,000)



## ★ 1 地点露頭柱状圖

## ★ 2 地点露頭柱狀圖

第3図 上ノ平城跡面の表層地質柱状図 (左A地点・右B地点)

第1表 上ノ平城跡のテフラ等分析結果

上ノ平城跡★2地点

固形	採集地点	地 状	火山 結晶%	火山 ガラス%	岩 片 割合%	鉱物・岩片等	火山ガラス の形態	特徴・対比その他の 記述
1	0.10	黒土	70	5	25	oxp, mt, cpx, ho, bi, fl, 火山岩片、風化岩片	bw -	御嶽上部テフラ>風化岩片>始 及Dz-K(Ah)AT・鬼界アカホヤ 火山片(K-Ah)
2	10.20	黒土	50	5	15	oxp, mt, cpx, ho, bi, fl, コータス 状火山岩片、風化岩片	bw	御嶽上部テフラ>風化岩片>AT K-Ah
3	20.30	黒土	75	3	22	oxp, mt, ho, fl, 火山岩片、風化岩 片	bw/bre-gb	御嶽上部テフラ>風化岩片>AT K-Ah
4	30.40	褐色土	70	10	20	oxp, mt, cpx, ho, bi, ol, 火山岩片、 風化岩片	bw	御嶽上部テフラ>風化岩片>AT
5	40.50	褐色土	75	3	22	oxp, mt, cpx, ho, bi, fl, 火山岩片	bw	御嶽上部テフラ>風化岩片>AT
6	50.60	褐色土	80	1	19	oxp, mt, cpx, ho, ol, fl, コータス状 火山岩片	bw	御嶽上部テフラ>風化岩片>AT
7	60.70	褐色土	80	1	19	oxp, mt, cpx, ho, ol, fl, コータス状 火山岩片	bw	御嶽上部テフラ>風化岩片>AT
8	70.80	褐色土	80	0	20	cpx, cpx, mt, ol, fl, コータス状火山 岩片>風化岩片	御嶽上部テフラ	
9	80.90	褐色土	70	0	30	cpx, cpx, mt, ol, fl, コータス状火山 岩片>風化岩片	御嶽上部テフラ	
10	90.100	褐色土、赤色スコリ ア蛋白	70	0	30	cpx, cpx, mt, ol, fl, コータス状火山 岩片>風化岩片	御嶽上部テフラ	
11	100.110	褐色土	70	0	30	cpx, cpx, mt, ol, ol, 頂立つ	御嶽上部テフラ	
12	110.120	褐色土	70	0	30	cpx, cpx, mt, ol, fl	御嶽上部テフラ	
13	120.130	褐色土	70	0	30	cpx, cpx, mt, ol, fl	御嶽上部テフラ	
14	130.140	褐色土	70	0	30	cpx, cpx, mt, ol, fl, 火山岩片>風 化岩片	御嶽上部テフラ>風化岩片	

上ノ平城跡★1地点

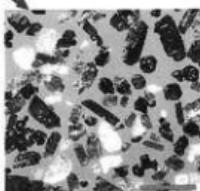
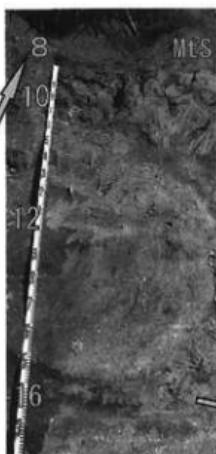
1	0.10	褐色土	58	2	40	oxp, cpx, mt, ho, fl, ol, コータス状 火山岩片	bw	御嶽上部テフラ AT
2	30.60	褐色土、硬質、赤色 粘土質入	60	0	40	cpx, cpx, mt, ho, fl, ol, コータス状 火山岩片	御嶽上部テフラ	
3	100.110	褐色土	60	0	40	cpx, mt, ho, fl, ol, コータス状火山 岩片	御嶽上部テフラ	
4	150.160	褐色土	20	0	50	oxp, mt, ho, fl, ol, 風化岩片	風化岩片>御嶽テフラ	
5	180.190	赤褐色スコリアのレ ンズ	10	0	90	oxp, mt, ho, fl, 火山岩片、風化岩 片	風化岩片>御嶽テフラ	
6	200.210	褐色土	40	0	60	cpx, cpx, mt, ol, 火山岩片、風化岩 片	風化岩片>御嶽テフラ	
7	240.260	褐色土、赤色スコリ ア蛋白	70	0	30	cpx, cpx, mt, ol, fl, コータス状火山岩 片	三荷スコリア(MS)を含む	
8	260.300	赤褐色土	90	0	10	oxp, mt, cpx, fl, 火山岩片	MtS	
9	300.340	淡褐色土、硬質	70	0	30	cpx, cpx, mt, ol, bi, fl, 火山岩片	御嶽上部テフラ	
10	330	赤褐色スコリア混入 地	70	0	30	cpx, mt, ol, fl, コータス状火山岩 片	御嶽上部テフラ	
11	340.350	灰褐色土	60	0	40	flopx, mt, ho, 白~灰褐色火山岩片	御嶽下部テフラ?	
12	370.410	ベージュ色土	60	0	40	flopx, mt, ho, 白~灰褐色火山岩片	御嶽下部テフラ?	
13	410.430	灰褐色土、黄色錫石 混入	20	0	80	flopx, mt, ho, 白~灰褐色火山岩片	御嶽下部テフラ?	
14	430.450	黄色錫石密集	70	0	30	flopx, ms, 白~灰褐色火山岩片	御嶽下部テフラ?	
15	450.460	淡褐色土、黄色錫石	70	0	30	flopx, ms, ho, 白~灰褐色火山岩片	御嶽下部テフラ?	
16	460.470	淡灰色錫質土、黄色 錫石混入	30	0	70	flopax, ms, 白~灰褐色火山岩片多 い	御嶽下部テフラ?	
17	470.480	黄色錫石、黄色錫 石	60	0	40	flopax, ms, cpx, 風化岩片>火山 岩片	反野錫石(TnP)を主	
18	480	黑灰色土じ	40	0	60	flopax, ms, 風化岩片>火山岩 片	TnPを含む	
19	480.490 m	黄白色錫石、0.2~1c m	65	0	35	flopax, ms, 風化岩片>火山岩 片	TnPを主	
20	490.500	黄白色錫石、粗粒	60	0	40	flopax, ms, cpx, ho, 風化岩片、火 山岩片	TnPを主	
21	500.520	黄白色錫石、逆級化	80	0	25	flopax, ms, cpx, ho > 風化岩片、火 山岩片	TnP	
22	520.540	黄白色錫石、細粒	80	0	20	片	TnP	
23	540.557	灰褐色土	70	0	30	flopx, mt, cpx, heo, bi, qt, 火山岩片	奈川錫石(NgP)を含む?	
24	557.560	灰色部3~4cm	60	0	40	flopx, mt, cpx, heo, bi, qt, 火山岩片	奈川錫石(NgP)を含む?	
25	560.570	灰褐色土	70	0	30	flopx, mt, cpx, heo, bi, qt, 火山岩片	奈川錫石(NgP)を含む?	
26	570.572	青灰色部2cm	80	0	20	flopx, mt, cpx, heo, bi, qt, 火山岩片	奈川錫石(NgP)を含む?	
27	572.600	灰褐色土	80	0	20	flopx, mt, cpx, heo, bi, qt, 火山岩片	奈川錫石(NgP)を含む?	
28	600.615	褐色錫石	90	0	10	flopax, ms, 火山岩片	伊豫錫石(ImP)	
29	615.620	下部赤色部	80	0	20	flopax, ms, bi, ve, 火山岩片	ImPト?	
30	620.625	灰黑色砂	0	0	100	bi, fl, qt, 風化岩片	新潟岩風化	

片例

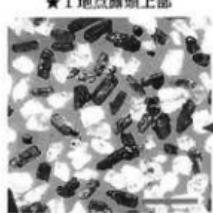
岩片等 oxp:斜方輝石 cpx:單斜輝石 ol:かんらん石 bi:磁鐵鉄鉱 ho:各閃石 bi:黒雲母 ve:バーミキュライト fl:長石 qt:石英  
火山ガラスの形態性 bw:包型岩 pn:核石型 br:褐色ガラス



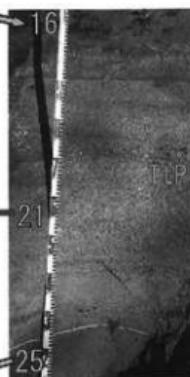
★ 1 地点テフラ露頭  
番号は柱状図・分析表の  
試料番号



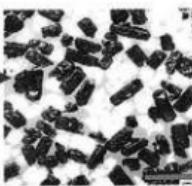
三岳スコリア(Mts)の鉱物  
斜方輝石・单斜輝石  
磁鉄鉱など



辰野軽石(CTP)の鉱物  
斜方輝石・单斜輝石  
磁鉄鉱など



★ 1 地点露頭下部



伊那軽石(InP)の鉱物  
斜方輝石・磁鉄鉱など

★ 1 地点露頭最下部



★ 2 地点テフラ露頭  
番号は柱状図・分析表の  
試料番号

## 第3節 城跡の概要

### 1 城跡の概観

上ノ平城跡は、南小河内集落の東方丘陵突端部に構築されている。城跡の範囲は、東西約450m、南北約200mを測り、その主要部は南北に連なるとされる五条の堀により区画される。長野県教育委員会編『長野県指定文化財調査報告』では、西から「四の郭」「一の郭（主郭）」「二の郭」「三の郭」としているが、本書では宮坂武男氏の見解に従い、西から「二の郭」「一の郭（主郭）」「三の郭」「四の郭」として記述する。このうち「三の郭」と「四の郭」は、東西約180mにわたる堀により南北に分けられる。五条の堀のうち、一番西側の「一の堀」と「三の堀」の北半分は現存しているが、その他の堀は、両端部にわずかに堀らしき痕跡が残っているにすぎない。土塁については、「一の堀」西の小高地に見られるが、その他には現在ほとんど確認することができない。この他に、城跡の北側及び南側の急傾斜地には、いくつかの帯郭が構築されている。

上ノ平城跡の周辺には、岩ヶ城、中の小屋、豊久保、城ヶ峰、小式部城など、多くの山城が存在する。また、城跡のすぐ北側、知久沢右岸段丘上には居館があったと伝えられており、付近には日輪寺や普済寺などの古刹がある。こうしたことから、城跡の遺構としては不明な箇所もあるものの、郭、堀、帯郭などのように、現状でも城跡の形状を確認できる箇所も多く、周囲の豊かな自然環境や歴史的環境も含めて、極めて良い状況にあると言える。

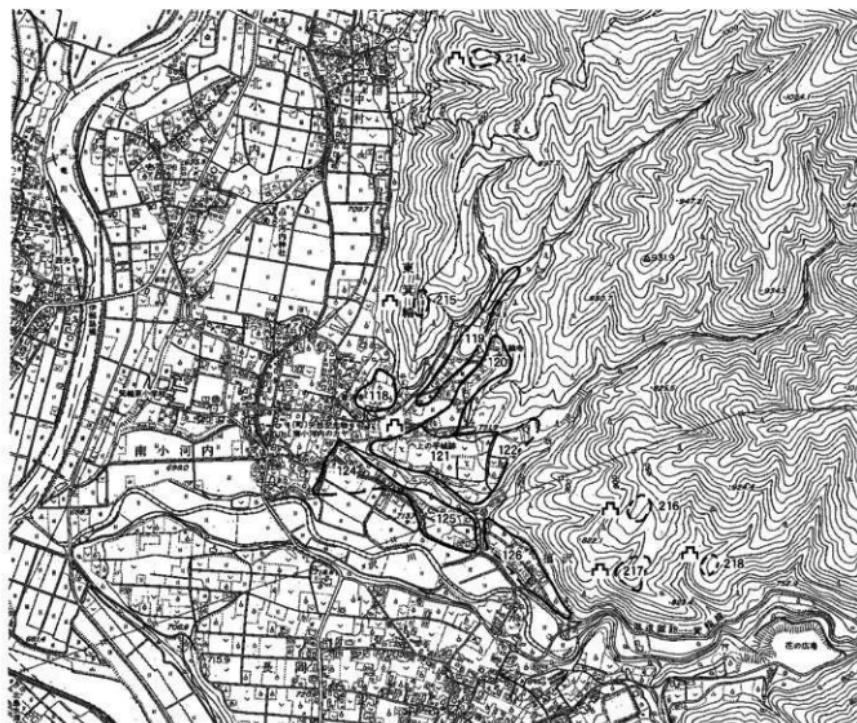
### 2 城跡の歴史

上ノ平城跡については、市村成久氏により調査が行われている。『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告第16集』（昭和10年）によると、「平安時代末に源満仲の曾孫為公によって始めてこの地に造築され、以来子孫が比處を根拠に栄えたと伝えるが明白でない。しかし、鎌倉時代中期には諫訪氏と同族の知久氏の拠るところとなり、敦俊の子信貞が知久郷に移るまでは当城の存続していたことは明らかである。」とある。さらに「知久氏退去後この城は他者の使用することがなかったため、旧遺構を伝えている点で貴重な存在である。」（同報告書）とあるように、これまでには、平安時代末期～鎌倉時代にかけての城であり、その後は使用されることがなかったとされてきた。しかし、上ノ平城について記している文献資料はほとんど無く、詳細は不明である。その中で、近世の文献等に、小河内にあったと思われる城、及びそれに関係する氏族のものと思われる記述があるので、参考までに記しておく。慶長16年（1611）に小笠原家の重臣二木寿齋が記録した『二木寿齋記（二木家記）』には、武田氏の箕輪攻めの記述の中に「福与の城に籠りし武士、箕輪頼親侍衆、松島、大出、長岡、小河内、福島、木下、この衆箕輪殿の家中にて大身の武士なり…」とあり、福与城主藤沢頼親の侍衆の中に、小河内に関連すると思われる人物の記述がみられる。地誌等では、延享3年（1746）に、箕輪郷の関盛胤が、伊那郡各郷村の変遷を記述した『伊那温知集』の南小河内の記述として、「古城あり、天文の頃阿部修理亮住す。天正7年（1579）正月卒す。法名天長忠全。同じ頃、淵井市左衛門住す。天正中菅沼大膳亮よりの軍触書簡に有り」とある。また、文化9年（1812）に中村元恒が伊那郡の疆域、風俗、仏寺等について記した『伊那志略』には、小河内氏宅の記述として、「名字不詳、里老いわく藤沢頼親麾下の士、天文中福与城において戦死云々未詳」という記述がある。

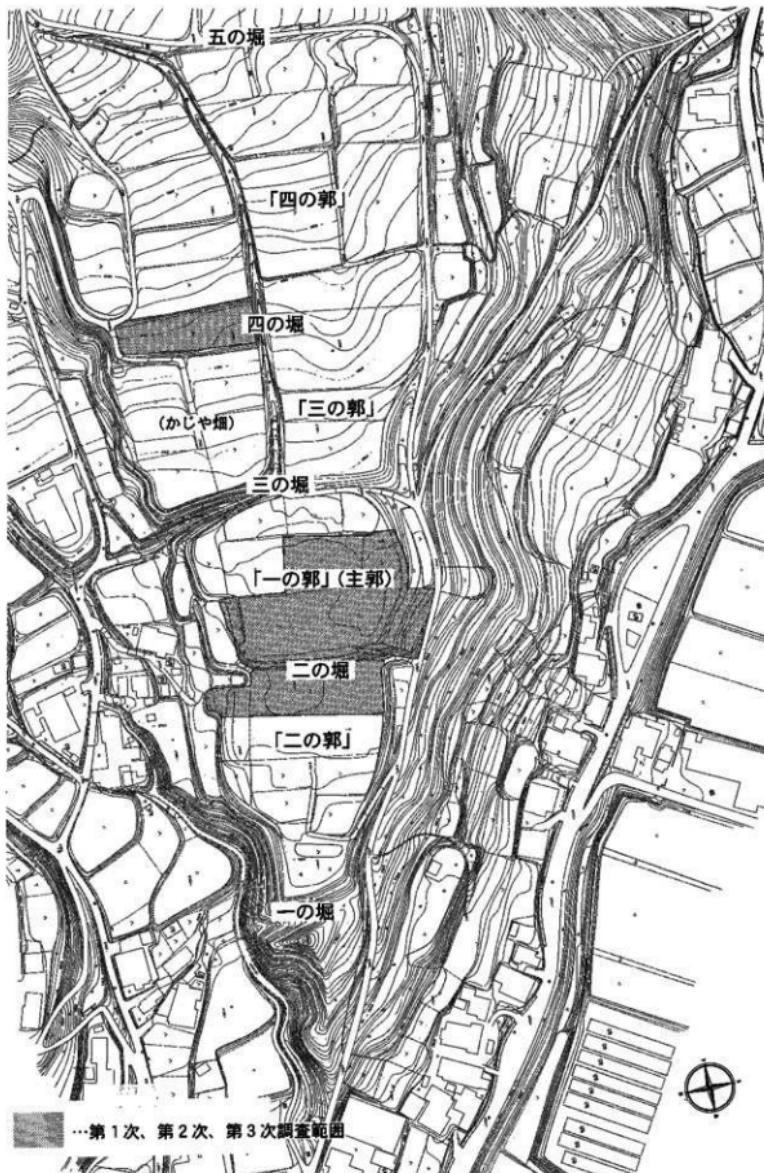
いずれにしても、文献資料から上ノ平城跡について考えることは難しく、詳しいことはわからないが、これらの資料からは、戦国時代に南小河内に城があったことが伺える。

第2表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代							立地	地目	備考
			旧	繩	弥	古	奈	平	中			
121	上ノ平	南小河内	○	○	○	○	○	○	○	台地	畠・荒地	県史跡・城跡含む
118	普濟寺	#		○				○	○	台地	宅地・畠	調一昭63・平11
119	日輪守塗	#		○	○	○	○	○	○	台地	宅地・畠・荒地	
120	知久沢	#		○				○	○	扇頂	宅地・畠	
122	御射山平	#		○				○	○	台地	畠	
124	日向	#		○	○			○		扇頂	田	
125	疋田	#		○				○		扇頂	畠・田	
126	福沢	#		○	○			○	○	扇頂	宅地・畠	
214	城峰	#						○		山頂	林	城跡
215	豊久保	#						○		山頂	林	城跡
216	中の小屋	#						○		山頂	林	城跡
217	岩ヶ城	#						○		山頂	林	城跡
218	でえら	#						○		山頂	林	城跡



第4図 周辺遺跡分布図 (1:15,000)



第5図 上ノ平城跡平面図 (1 : 2,000)

## 第Ⅱ章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経過

上ノ平城跡の位置する南小河内区を含む東箕輪地区は、郷土の歴史に対する関心が高く、これまで大槻幹氏、井沢武雄氏、小口珍彦氏ら多くの郷土史家を輩出してきた。この南小河内区において、平成9年に「上ノ平城跡地域活性化事業委員会」が組織され、城跡を含む地域活性化事業への取り組みが始まった。箕輪町は同委員会との協議を行い、城跡の保存及び整備活用のための事業を計画することとなった。しかしながら、城跡の内容等については不明な点が多く、現状では具体的な整備を進めていくことは困難であり、城跡について少しでも明らかにする必要があるとの見解に達した。そこで、整備計画立案のための城跡の基礎資料を得るために手段として、平成10年度に町単独事業として試掘調査を実施するに至った。

平成10年度の試掘調査では、主郭とされる一の郭内部の調査を行った。その結果、礎石建物址らしき遺構等を確認することができたが、調査の目的が曖昧で、準備も不十分であったため不明な点が多く、調査としては不十分なものであった。その後、長野県教育委員会と協議を行い、将来的な復元整備などの可能性も考慮して、城跡全体にわたる土塁や堀などの遺構の有無の確認と、出土遺物による城跡の使用年代の検討を行うことが必要であるとの指摘を受けた。これを受けて町教育委員会は協議を行い、城跡全体において調査を行うことは、現在の状況では困難であると考え、城跡の破壊を最小限に留めながら、その内容を最大限把握できるような調査を行う必要があるとの見解に達した。そこで、これまで主郭とされてきた一の郭（以下主郭と記述する）の遺構の有無の確認及び遺物による使用年代の検討により、城跡の内容を把握することを目的とし、さらに2年間かけて、国及び県の補助を受け、整備計画立案のための試掘調査を行うこととなった。なお、一の郭が主郭であるかどうかについては疑問視する見解もあるが、この報告書では主郭と考えて記述する。

### 第2節 調査概要と調査体制

1 遺 踪 名	上ノ平城跡		
2 所 在 地	長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪2,831番地他		
3 事業期間			
平成11年度	11年10月28日～1月26日（調査）	1月27日～3月31日（整理）	
平成12年度	12年10月17日～12月26日（調査）	12月27日～13年3月16日（整理）	
4 事 務 局			
教 育 長	藤沢健太郎（平成12年1月離任）	大槻 武治（平成12年1月就任）	
文化財課長	柴 登巳夫（箕輪町郷土博物館館長）		
係 長	原 省吾		
係 員	赤松 茂（箕輪町郷土博物館学芸員 平成12年3月まで）		
	日野 和政（箕輪町郷土博物館学芸員 平成12年4月より）		
	柴 秀毅（箕輪町郷土博物館学芸員）		
臨 時 職 員	牧田 初恵（平成11年度）	柴 チエ子	中坪 恵子（平成12年度）
5 調 査 団			
調 査 団 長	藤沢健太郎（平成11年度）	大槻 武治（平成12年度）	

調査担当者	赤松 茂 (平成11年度)	柴 秀毅 (平成12年度)			
調査員	根橋とし子	福沢 幸一 (平成11・12年度)			
調査参加者					
11年度	井沢はずき 大槻 貞男 桑原 篤 洞口 秋人 山田 武志	泉沢徳三郎 大槻 茂範 後藤 主計 堀 五百治 市川 俊男	市川 俊男 大槻 泰人 小松 峰人 田中 忠男 大槻 泰人	井上 武雄 片桐 勇 田中 忠男 宮下 容子 片桐 勇	井上 隆次 倉田 千明 伯耆原 正 向山幸次郎 倉田 千明
12年度	後藤 主計	田中 忠男	伯耆原 正	金沢 蘭	池上 賢司

### 第3節 調査経過（調査日誌から）

#### 平成11年度

- 10月28日（木） 調査地の草刈り、テントの設営、トレーナーの設定。
- 11月2日（火） 1～4・7 トレーナーの掘り下げ。2 トレーナー西方より多くの石が出土。
- 11月4日（木） 1～4・7 トレーナーの掘り下げ。堀はV字状であることを確認。
- 11月5日（金） 1～4・8 トレーナーの掘り下げ。1 トレーナー西より石及び焼土が出土。
- 11月8日（月） 各トレーナーの掘り下げ。8 トレーナーより大量に石が出土。
- 11月9日（火） 各トレーナーの掘り下げ。8 トレーナー集石の写真撮影。1・3 トレーナーでは断面で土壌らしき層を確認。
- 11月10日（水） 各トレーナー及びトレーナー間斜面の掘り下げ。2 トレーナー西部で焼土を確認。
- 11月15日（月） 各トレーナー及びトレーナー間斜面の掘り下げ。5・6 トレーナー写真撮影。
- 11月16日（火） 各トレーナーの掘り下げ、土層断面測量。8 トレーナー東の斜面より大量の石を確認。
- 11月17日（水） 各トレーナーの掘り下げ。3・9 トレーナーの土層断面測量。
- 11月18日（木） 土層断面測量、写真撮影等。10・11 トレーナーを設定し、掘り下げを行う。  
箕輪東小学校5・6年生が現地を見学。
- 11月19日（金） 土層断面測量、写真撮影等。10・11 トレーナーでは堀を確認することはできず。
- 11月20日（土） 南小河内区民の皆さんを対象とした現地見学会が行われる。
- 11月22日（月） 3・4 トレーナー写真撮影。8 トレーナーの土層断面測量。
- 11月26日（金） 土層断面測量。
- 11月29日（月） 土層断面測量。2 トレーナー西の集石箇所にサブトレーナーを入れ掘り下げを行う。
- 11月30日（火） 4 トレーナー平面測量。「四の堀」調査地の全体測量。
- 12月1日（水） 各トレーナーの平面測量。
- 12月6日（月） 各トレーナーの平面測量。10 トレーナー写真撮影。
- 12月8日（水） 10・11 トレーナー土層断面測量。
- 12月9日（木） 2 トレーナー集石箇所の平面測量。11 トレーナー写真撮影。
- 12月10日（金） 測量作業。
- 12月13日（月） 測量作業。10・11 トレーナー埋め戻し。
- 12月17日（金） 信州大学笛本正治教授より指導を受ける。
- 12月24日（金） 各トレーナー写真撮影。プレハブ・テント・道具の撤収。
- 1月11日（火） 長野県埋蔵文化財センターの河西克造氏より指導を受ける。

- 1月19日（水） ラジコンヘリによる写真撮影及び地形測量を行う。  
1月26日（水） 埋め戻しを行い、作業を終了する。

平成12年度

- 10月17日（火） 調査の準備。  
10月19日（木） コンテナハウス、トイレの搬入。  
10月24日（火） 調査地の草刈り。道具の搬入。  
10月26日（木） 調査地の草刈り。トレーナーの設定。  
10月27日（金） 12トレーナー掘り下げ。集石及び平石が出土。  
10月30日（月） 12トレーナー掘り下げ。長野県埋蔵文化財センター河西克造氏より指導を受ける。  
10月31日（火） 12トレーナー掘り下げ完了。集石・平石写真撮影。  
11月1日（水） 13トレーナー掘り下げ。河西氏より指導を受ける。  
11月6日（月） 13トレーナー掘り下げ。深さ25センチ付近でテフラ層を確認。土壌はなし。  
11月8日（水） 13トレーナー掘り下げ。地下式坑のような深い穴を確認。  
11月9日（木） 14トレーナー掘り下げ。土星らしき人為的堆積土を確認。  
11月10日（金） 14トレーナー掘り下げ。一面に炭化物がある層から内耳土器が多く出土する。  
11月13日（月） 14トレーナー掘り下げ。13トレーナー写真撮影。河西氏より指導を受ける。  
11月14日（火） 14トレーナー掘り下げ。12トレーナー土層断面写真撮影、13トレーナー土層断面測量。  
11月15日（水） 14トレーナー掘り下げ。12トレーナー土層断面測量。  
11月16日（木） 15トレーナー掘り下げ。12トレーナー土層断面測量。14トレーナー土層断面写真撮影。  
11月21日（火） 15トレーナー掘り下げ。大量の石が出土する。14トレーナー土層断面測量。  
11月22日（水） 15トレーナー掘り下げ。14トレーナー土層断面測量。  
11月24日（金） 15トレーナー掘り下げ。河西氏より指導を受ける。土壌の有無を確認するため若干拡張する。松島信幸先生・寺平宏先生に現場の地形・地質について見ていただく。  
12月4日（月） 15トレーナー掘り下げ。集石の測量。  
12月6日（水） 15トレーナー掘り下げ。集石の測量。集石付近より焼土を確認する。  
12月7日（木） 集石の測量。河西氏より指導を受ける。  
12月8日（金） 15トレーナー写真撮影。長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏より指導を受ける。  
12月9日（土） 近隣市町村の文化財担当者の方々に現地を見ていただく。  
12月12日（火） 15トレーナー土層断面測量。集石の測量。  
12月13日（水） 集石の測量。テントの撤収、一部道具の片づけ。  
12月14日（木） 集石の測量。松島・寺平両先生現地を視察。  
12月15日（金） 信州大学笹本正治教授、長野県教育委員会平林彰指導主事より指導を受ける。  
12月19日（火） 南小河内区民の皆さん及び箕輪東小学校3年生の皆さんを対象とした現地見学会を行なう。  
12月20日（水） 15トレーナーレベル入れ、12・13トレーナー埋め戻し。  
12月21日（木） 15トレーナーレベル入れ。13・14トレーナー埋め戻し。  
12月22日（金） 14・15トレーナー埋め戻し。道具の片づけ。  
12月26日（火） コンテナハウス、トイレの搬出。全ての作業を終了する。

## 第Ⅲ章 調査結果

### 第1節 調査の方法と結果概要

第2次調査の開始にあたっては、第1次調査終了後に長野県教育委員会から受けた指導をもとに、主郭における土壘及び堀の有無の確認と、出土遺物による城跡の使用年代の確認を目的として調査を行うこととした。また、あわせて四の堀の確認も行った。主郭においては、現状では土壘の痕跡はほとんど確認できず、これまでの調査報告でも確認できないとされてきた。また、二の堀については現状では確認できない。そこで、こうした造構の有無及び形状を確認するため、主郭の中心部から縁辺部及び二の堀にかけてトレーンチを設定し（第6図）、土層断面の観察によって造構の確認を行うこととした。ただし、城跡のほとんどが私有地であり、耕作している畠も多いことから、これらの中で調査可能な箇所においてのみ調査を行うこととなった。

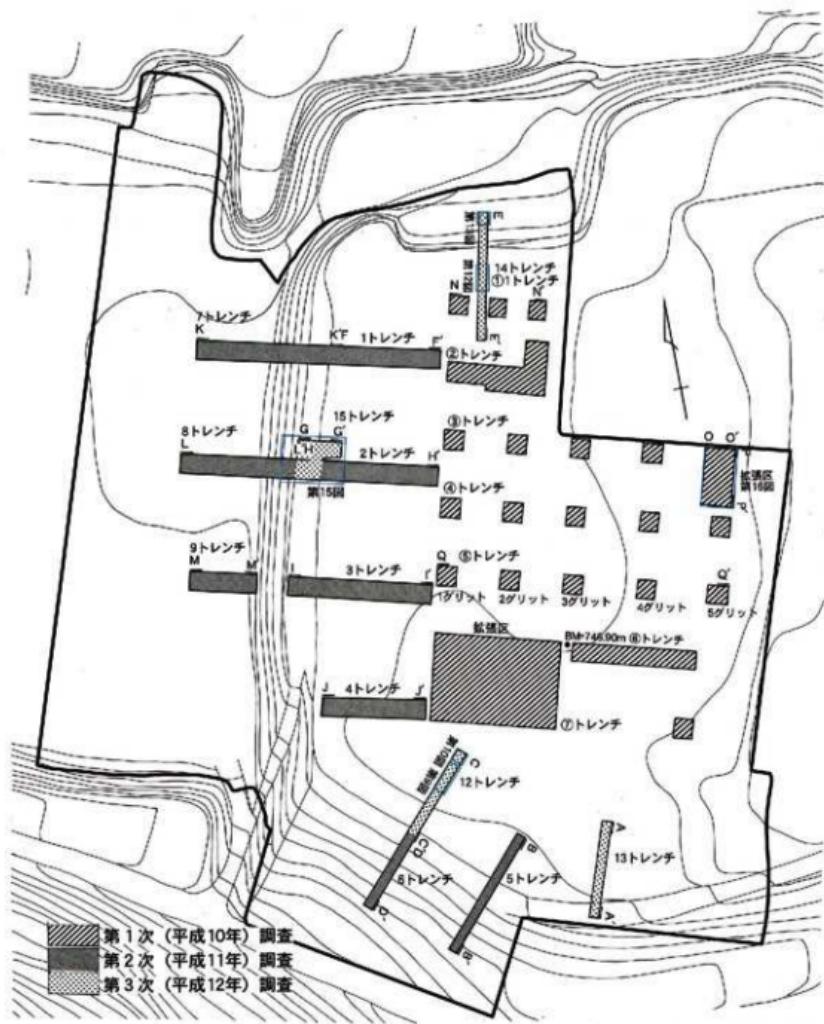
調査にあたっては、造構及び遺物をできるだけ破壊しないよう、掘削作業はすべて人力で行った。また、城跡全体の地形平面図を作成するため、作物の収穫後にラジコンヘリによる測量を行った。

調査の結果、出土遺物から、城跡に関すると思われる遺物の主体は15世紀中頃～16世紀中頃にかけてのものであった。また、造構では土壘や堀を確認し、2トレーンチでは土壘は確認できなかったものの、8トレーンチ（二の堀）にかけて大量の石が確認された。これに関して、現地を視察して頂いた信州大学人文学部の笹本正治教授からは、これらの石が城の破城に関係する可能性があるのではないかとの指摘を頂き、また、長野県埋蔵文化財センター調査研究員の河西克造氏からは、出入口にあたる可能性があるのではないかとの指摘を頂いた。

第3次調査の開始にあたっては、第2次調査終了時に笹本氏や河西氏から頂いた指導をもとに調査の方法を検討した。また、今回の調査が第1次調査も含めた全ての調査のまとめにあたることから、城跡の調査に詳しい河西氏とさらに協議を行い、その指導を受けて調査の方針を検討した。その結果、第2次調査で主郭南側の土壘を確認するために設定したトレーンチ（5・6トレーンチ）は、長さが内側に足りなかった可能性が考えられるため、6トレーンチを内側に延長したトレーンチ（12トレーンチ）と、その北側にもう一本トレーンチ（13トレーンチ）を設定して、再度土壘の確認を行うこととした。また、主郭北側にもトレーンチを設定して（14トレーンチ）土壘の確認を行った。さらに、第2次調査で出入口の可能性があるとの指摘をうけた箇所については、土壘の開口を確認するためのトレーンチ（15トレーンチ）を設定して、調査を行うこととした。

今回の調査も、すべて手作業で行うこととし、それぞれのトレーンチにおいてテフラ層を確認するまで掘り下げ、中世生活面を含めた全体の層位関係を把握することを目的の一つとすることにした。また、遺物と土層の対応関係について検討するため、出土した遺物は全て位置及びレベルを入れた上で取り上げることとした。なお、造構を極力破壊することがないよう、原則として土壘以外の造構は、造構上面での記録作業の後、現状のまま埋め戻すこととした。

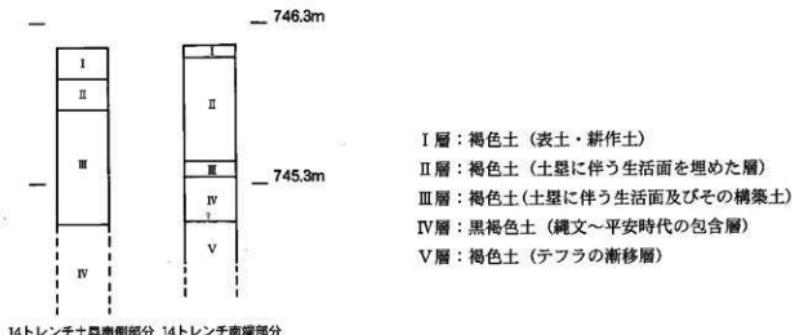
調査の結果、主郭南側の一部及び北側では土壘を確認した。また、出入口ではないかとの指摘をうけた箇所については、北側断面において土壘の開口部付近のものと思われる土層を確認したとともに、それ以外の箇所からは第2次調査を上回る大量の石を確認した。今回の調査でも出土した遺物は15世紀中頃～16世紀中頃のものが主体であった。



第6図 トレンチ設定図 (1 : 500)

## 第2節 遺跡の層序

天竜川左岸における扇状地並びに段丘上における地質構造は、耕土などの黒褐色腐植土→火山灰土層（テフラ層）→砂岩・粘板岩・花崗岩を中心とする円礫層・砂層という堆積状況が普遍的にみられる。本調査地では、黒褐色腐植土とテフラ層の間に、古くは縄文時代早期から中世までの遺物を含む包含層が確認され、そのうち城跡遺構を含む中世の遺物包含層は、基本的にそれ以前の層の上（一部削平）に構築されている。調査地における基本層序は以下のとおりである（第7図）。



第7図 基本層序図 (1:30)

城跡は、東の山地が西に向かって延びる尾根上に位置し、南北にのびる5条の堀により区画された階段状の郭を有している。主郭においては、その中心部ではIV層が薄く、場所によっては削平されているが、西に行くに従って厚さを増す。また、南北においても同様で、中心部においてはIV層が薄く、反対に縁辺部（北・南）では厚くなる。二の郭における東の縁辺部（7～9トレンチ）では、IV層は削られて無いことが確認された。そのため、城は基本的に中世以前の包含層の上に構築されたものであり、郭を階段状に構築したため、元の地形の高い場所（各郭の東側）ではIV層を削り、元の地形の低い場所（各郭の西側等）ではIV層の上に盛土をして、生活面を構築しているものと考えられる。

## 第IV章 遺構と遺物

本城跡を含む上ノ平遺跡は、これまで旧石器・縄文・平安・中世・近世の複合遺跡として知られ、今回の調査でも縄文時代や平安時代の遺物が確認された。しかし、今回の調査は上ノ平城跡を解明するための資料を得ることを目的とした調査であるため、ここでは城跡に関係するであろう中世の遺構及び遺物についてのみ報告を行いたい。最初に主郭周辺の遺構・遺物について、南側・北側・西側・中央に分けて報告し、その後、中世に関するその他の遺構・遺物等について報告する。

### 第1節 主郭の遺構と遺物

#### 1 主郭の概要

城跡のほぼ中央に位置する主郭（一の郭）は、東西約60m、南北約58mの規模を有し、北東部のみさらに15mほど突き出した形状を呈している。主郭の標高は746mから749mを測り、尾根上部にあたる東側から西に向かって傾斜している。また、主郭の西半部では、北から40m付近から南端にかけて、それ以外の箇所よりも50～60cmほど高くなっている。現状では土壘の痕跡はほとんど認められないが、北縁部には、その他の場所よりもやや高い（約10～15cm）土の高まりが見られる。また、出入口もはっきりしていないが、これまでの見解では、地形や地名から北側が出入口ではないかと考えられている。

主郭の東西には堀がある。主郭東側の三の堀は、その北半部においてよく堀の形状を残しており、その上部幅は5.4～9m、深さは5.4～9m、底幅は2～3mを測る。三の堀南部、及び主郭西側にあるとされる二の堀は、現状では確認することができないが、二の堀両端部に僅かにその痕跡が認められる。

#### 2 主郭南側の遺構と遺物

##### （1）概要（第8図）

主郭南側では、土壘等の遺構の確認を目的として調査を行った。第2次調査では、主郭南西部に10m間隔でトレンチ（5・6トレンチ）を設定した。このうち6トレンチで、人為的堆積土と思われる層を確認したが、この段階では土壘と判断することはできなかった。そこで第3次調査では、6トレンチを北（内側）に延長したトレンチ（12トレンチ）と、その東側にもう1本トレンチ（13トレンチ）を設定し、調査を行った。

調査の結果、12トレンチでは地表下60～70cm、13トレンチでは地表下20～30cmにおいて、縄文～平安時代の遺物を含む黒色土層（包含層）が存在し、なだらかに南へ傾斜していることが確認された。また、その下にはテフラの漸移層及びテフラ層があり、同様に南へ傾斜していることが確認された。12トレンチ及び6トレンチでは土壘（純粹な防護のためのものか、生活面を構築するための縁のようなものは判断しにくいが、生活面より高い位置に人為的に土を盛っているので、この報告書では広義の意味で土壘と考えたい）を確認した。土壘に伴う生活面のレベルは12トレンチで標高746.0mを測る。そしてこの土壘は、褐色及び暗褐色の土（2・3層）で覆われていることが確認された。一方13トレンチでは土壘は確認できず、中世以前の包含層と思われる黒色土層は削られている箇所もみられ、その上に2層が整地されていた。2層からはカワラケの破片が1点出土しているだけであり、時期を判断することは難しいが、中世以前の包含層を削った上に構築されていることから、少なくともそれ以後のものと思われる。

この他に、12トレンチでは集石及び平石を各1箇所、13トレンチでは地下式坑1基を確認した。

## (2) 遺構 土壘

12トレンチ断面で確認された土壘は、基底部幅7.5m、上部幅4.9mを測り、上部には削られた痕跡がみられる。土層状況から7層がその生活面と考えられ、そこからの高さは現状で50cmを測る。傾斜は内側がなだらかであり、外側は急傾斜である。中世以前の包含層である黒色土層の上に構築されており、土壘内側ではその黒色土層が削られている箇所がみられるため、まず中世以前の包含層（黒色土層）以下を削って土壘を構築し、その後生活面を構築したものと考えられる。土壘の構築に際しては、基底部及び中央部においては、ローム粒子を多く含む土を用いて硬く叩き締めて構築している。改修等の痕跡は認められない。

遺物は、基底部に近い25層からカワラケの破片1点が出土している。

### 集石1（第9図）

径10～20cmの石22個により構成される。石は砂岩・粘板岩で、城跡周辺に多く見られる石を用いている。土壘内側の裾部付近に位置し、石上部の標高は746.18～746.30mを測る。これは土壘構成土又はそれを埋めたと思われる層に相当するが、上部からの掘り込みが無いため、土壘の時期に対応するものと考えられる。集石下の掘り込みも認められず、石を集め置いた遺構であると考えられる。

### 平石（第10図）

12トレンチ北端で、長径38cm、短径28cmの上面が水平な石を確認した。土壘に伴う生活面である7層上面に位置し、標高は746.02mを測り、土壘と同時期のものと考えられる。1個のみの確認であるため判断は難しいが、上面がほぼ水平であり、土壘内側の主郭内部に位置することから、礎石建物址の一部である可能性も考えられる。

### 地下式坑

13トレンチで確認した。トレンチ南端部に一部を確認しただけであるため、形状及び規模は不明である。中世以前の包含層と思われる12層より袋状に掘り込まれており、底部は不整形で起伏があり、最も深い場所で深さ80cmを測る。覆土は、上方は褐色土の厚い層が、下方は黒色土を中心に複数の層が存在し、少なくとも2段階にわけて埋められた印象を受ける。

遺物は、9世紀中頃～後半ものと思われる灰釉陶器片が1点出土している。

## (3) 遺物

12トレンチ及び13トレンチからは、カワラケが1点ずつ出土している。小破片のため実測は不可能だが、12トレンチのものは土壘構成土から、13トレンチのものは2層からの出土であり、いずれもロクロ成形である。5トレンチからは常滑焼の破片と、青磁碗（第18図97）が出土している。青磁碗は龍泉窯系のもので、外面には削り出しによる鍋蓮弁文が施されている。

## 3 主郭北側の遺構と遺物

### (1) 概要（第11図）

主郭北側では、土壘等の遺構の確認を目的として調査を行った。第3次調査では、主郭北側から一段下の畝にかけてトレンチ（14トレンチ）を設定したが、これまでの見解では、主郭の出入口は北側にあるのではないかと考えられていたため、出入口遺構にかかりそうな場所を避けてトレンチを設定した。

調査の結果、主郭では地表下80～120cmにおいて、一段下の畝では地表下50～60cmにおいて、縄文～平安時代の遺物を含む黒色土層が存在し、北に向かって傾斜していることが確認された。トレンチ内北側の縁辺部では、この黒色土層は3層に分層され、その下にテフラの漸移層が確認されたが、トレ

ンチ内南側の主郭中央部に近い箇所では、黒色土層は場所によっては5cmと極めて薄く、すぐにテフラの漸移層が現れる箇所もあった。14トレンチでは、中世以前の包含層と思われる黒色土層の上に土壘を確認したが、この土壘構成土の中には黒色土も含まれることから、土壘内側の黒色土層が薄い箇所においては、この層を削って土壘の構成土としていると考えられる。

土壘の内側は、何層にもわたって硬く締まった層が構成されている。14トレンチにおける中世土器の柱状図（第11図）をみると、8層には特に多くの遺物が含まれており、また炭化物も大量に確認されたことから、ある時期にこの面で生活していた痕跡と考えられる。土器は多くが内耳鍋であり、土壘構成土からも同じような内耳鍋が出土している（同一固体になる可能性があるものもある）ことから、8層は土壘に伴う生活面であると考えられる。8層上面のレベルは標高745.57～745.77mを測る。8層より下にも硬く締まった層が何層も存在するが、出土遺物が8層のものと同様であり、その量も極めて少ないため、生活面ではなく、8層を構築するための整地層であると考えられる。

表土層直下の2層及び④層は、土壘とその生活面を広く覆うような形で堆積しており、これを埋めた土である可能性が考えられる。2層上部より出土した土器と、8層から出土した土器の中に接合するものが2点確認されたが、これは、土壘に伴う生活面を埋めた際の造成や耕作により混入したものと考えられる。

この他に14トレンチからは、集石2箇所、ピット1基を確認した。

## （2）遺構

### 土壘

土壘は現状で、基底部幅5.4m、上面幅2.5mを測る。高さは、土壘内側の主郭生活面からは30～40cm、主郭の外からは約1mを測る。傾斜は内側がなだらかで、外側が急傾斜である。中世以前の包含層である黒色土層の上に構築されており、土壘内側の主郭内部では黒色土層を削って、土壘の構築土に用いている。そのため、はじめに土壘を構築し、その後生活面を構築したものと考えられる。構築に際しては、基底部及び中央部においては、ローム粒子を多く含む土を中心的に、硬く叩き締めて構築し、上部及び両縁部においては、比較的軟らかい土を用いて構築している。改修等の痕跡は認められない。

遺物は、内耳鍋が3点、カワラケが1点、青磁碗が1点出土している。

### ピット

14トレンチ断面において確認された。土壘の内側3.5mに位置し、土壘に伴う生活面である8層上面から掘り込まれている。断面図上での径は36cm、深さは42cmを測る。土層状況や出土遺物から、土壘に伴う時期の遺構である可能性が考えられる。

### 集石2（第12図）

土壘の内側、南北160cmの範囲にわたって確認された。径5～25cmの砂岩・粘板岩など27個の石により構成される。石の上部は標高745.63～745.76mを測り、土壘に伴う生活面である8層とほぼ等しく、上部からの掘り込みも認められないため、土壘の時期に対応するものと思われる。下部に掘り込みの形跡は認められず、石を集め置いた遺構と考えられる。

### 集石3（第13図）

土壘の外側1mに位置し、径5～20cmの砂岩・粘板岩など35個の石により構成される。上部は標高744.54～744.73mを測り、④層及び⑥層に対応する。この両層は土壘の構築に際して整地された層と考えられるため、集石3もこれに伴うものと考えられる。上部からの掘り込みは認められず、下部にも掘り込みの形跡が認められないため、石を集め置いた遺構と考えられる。

## （3）遺物

土器は何れも破片であるが、総数63点が出土している（接合したもの除く）。内耳鍋は54点出土し

ている。このうち実測できたものは11点である。第17図30は、体部から口辺部にかけてクランク状に立ち上がり、推定口径は33.2cmを測る。その他はいずれも小破片であり、器形・法量等については明確でない。カワラケは7点出土し、うち4点を実測した。器形・法量は明確でないが、いずれもロクロ成型であり、色調は赤褐色である。第17図7は内外面に煤が付着しており、カワラケを灯明皿に転用したものと考えられる。この他に瀬戸美濃系の陶器破片と、中国龍泉窯系の青磁碗（第18図96）が1点ずつ出土している。青磁碗の外面には、削り出しによる細線蓮弁文が施されている。

鉄製品は1点（第19図26）のみ出土したが、器種は不明である。

#### 4 主郭西側の遺構と遺物

##### （1）概要（第14図）

主郭西側では、土壘の確認を目的としたトレンチ（1～4トレンチ）を設定し、さらに、その延長線上に二の堀を確認するためのトレンチ（7～9トレンチ）を設定し調査を行った。なお、1～7トレンチ間では、主郭と堀の関係を把握するため、トレンチ間の斜面についても調査を行ったが、2～8トレンチ間及び3～9トレンチ間は、基本的に調査を行っていないため、図面上では繋がっていないので了承されたい。

調査の結果、1・3・4トレンチでは土壘を確認した。土壘に対応すると思われる中世生活面は、土壘のすぐ内側で標高745.50～745.80m、それぞれのトレンチ東端で745.60～745.90mを測る。7～9トレンチでは二の堀を確認した。2トレンチでは土壘は確認されず、8トレンチにかけて大量の石が確認された。これらの石は、明確な遺構を構成しておらず、意図的に投棄されたような状況にあり、この場所が主郭の出入口にあたる可能性があるとの指摘を受けた。そのため、第3次調査では2トレンチに隣接する形で15トレンチを設定し、土壘の開口及び出入口に関する遺構の確認を目的として調査を行った。

調査の結果、15トレンチ北壁土層断面において土壘を確認した。また、土壘を確認できなかった範囲では、2トレンチを上回る大量の石が確認された。

##### （2）遺構

###### 土壘

基底部幅は1・3トレンチで約6m、現状での上面幅は1トレンチで3.3m、3トレンチで3.8mを測るが、上部は削られている。4・15トレンチでは、トレンチが土壘全体に及んでいないため規模は不明であるが、ほぼ同様であると推測される。土壘内側の主郭生活面からの高さは、いずれも50～60cmを測る。土壘は中世以前の包含層と思われる黒色土層の上に構築されており、版築ではないが、土を何層も積み重ねて構築している。改修等の痕跡は認められない。

###### 二の堀

堀上面の幅は6～6.8mを測る。深さは、二の郭生活面からは2.1～2.3m、現存する主郭土壘上面からは5.1～5.3mを測る。

堀の堆積土は細かく分層される。7トレンチの21～25層、8トレンチの29～32層、9トレンチの38～43層は、堀掘削時から時間が経過する間に自然に堆積した土であると考えられる。8トレンチでは、この直上の28層から、主郭より崩落したと思われる石が多く確認された。このため29層及び30層上面が、主郭からの石崩落直前の堀底であると考えられ、28層は石と一緒に崩落した土と考えられる。7・9トレンチではこのような状況はみられない。

7トレンチの4～20層、8トレンチの4～27層、9トレンチの13～37層は、自然に堆積した土であると考えられ、7トレンチの16層、8トレンチの21層、9トレンチの22層付近には水がたまつた形跡が認められる。ただし、8トレンチにおいては、その間にも人為的カクランと思われる層（5～19層）

が存在し、主に主郭方向から崩落した土と考えられる。そして、これらのカクラン層と28層の間に自然堆積と思われる層（20～27層）が存在することから、後述する主郭出入口付近での破壊行為後、ある程度時間がたった段階で（20～27層の堆積後）、主郭生活面を埋める等の行為に及んだ際に、崩落した土と推測される。なお、7・8トレンチの1～3層、9トレンチの1～12層は、後世畠として使用した際に人為的に造成されたものと思われる。

#### 出入口遺構（第15図）

2トレンチ及び15トレンチでは大量の石が確認された。石の多くは遺構を構成していないと思われ、意図的に投棄された感を受ける。これらの石が確認された範囲では土塁は確認されず、石がみられなくなるトレンチ北端部において始めて土塁が確認された。そのため、石が大量に確認された範囲においては土塁が無く、土塁が開口する出入口である可能性が考えられる。

石の中からは、建物の礎石と思われる平石が4個確認され（礎石a～d）、何らかの建物があったことが考えられる。礎石上面は標高745.22～745.59mを測り、礎石aとcでは約26cm、礎石cとdでは約37cmのレベル差がある。礎石a～cを15トレンチ断面図上に投影した図を見ると、それぞれの礎石は、中世以前の包含層である黒色土層上面に置かれていることがわかる（礎石aは黒色土層から礎石の下面まで5cm以上の差があるが、礎石の位置と断面図の位置が50cm以上離れているので、ほぼ直上と考えることができる）。そのため、礎石建物址は中世以前の包含層の地形に沿って建てられており、レベル差があるのはそれによるものと思われる。それぞれの礎石の間隔は、礎石a-bが約120cm（4尺）、礎石b-cが約150cm（5尺）、礎石a-dが約210cm（7尺）あり、礎石a～cが一列を構成する建物であったと考えられる。土塁幅を考慮すると、礎石cの東にまだ礎石がある可能性も考えられるが、未調査のため不明である。この礎石建物址については、土塁開口部に位置する建物であることから、門等の可能性が考えられる。なお、トレンチ南断面では土塁が確認されなかったことから、南側の土塁の先端はもう少し南であると考えられ、礎石a～cに対応する礎石がもっと南にある可能性も考えられる。

この場所からは石とともに、大量の焼土と炭化物が確認された。その量は礎石建物址の範囲内に特に多く、礎石dの上面、その上に重なる石との間（下面）から焼土が確認された。そのため、門と思われる建物が何らかの理由により焼失し、その後出入口を破壊する等の目的で大量の石が投げ込まれたものと推測される。この他に、土塁を補強するためのものと思われる立石や、この立石が倒れたと思われる石が確認された。

### （3）遺物

主郭西側では、上面確認も含め総数97点の土器が出土した。このうち実測できたものは32点である。内耳鍋は50点出土しており、うち15点を実測した。第17図21と24は、体部から口辺部にかけてクラシック状に立ち上がる。26は直線的に立ち上がり、口縁部がやや内湾する。26の耳部には、煤の付いていない帯状の痕跡が認められ、ひもを通したものと考えられる。実測は出来なかったが、4トレンチからは底部にオコゲのような炭化物が付着した内耳鍋が確認された。この他は何れも小破片であり、器形・法量等は明確でない。カワラケは10点出土し、うち4点を実測した。小破片であり、器形・法量等ははっきりしないが、いずれもロクロ成形である。第18図67は灰釉平碗である。71～73は天目茶碗である。このうち73とその同一個体と思われる破片には、壊れた箇所を漆で補強した痕跡が認められる。87は志野丸皿であり、今回の調査で確認できた唯一の17世紀前半の遺物である。88は茶入れ、89は擂鉢である。90と91は常滑焼の甕であり、口縁はN字状に折り返している。94は瓦質土器の風炉である。口縁部ヘラミガキの後、雷文及び菊花文のスタンプが押されている。この土器は3トレンチ（主郭内）と9トレンチ（二の堀）から出土した破片が接合したものであり、土塁と堀の関係を考えるうえで重要な資料である。99は中国産の白磁V類であり、11世紀後半～12世紀前半の遺物である。100と

102は同じく中国産の青磁碗で、いずれも龍泉窯系である。この他に実測はできなかったが、中国同窯系の青磁破片が1点出土している。

鉄製品（第19図）では釘の出土が多く、全体での出土17本のうち14本が出土している。24は板型の鉄製品であるが、用途は不明である。28は楕円形鉄滓としてとらえた。土器と思われるものが付着しており、羽口の可能性も考えられる。

## 5 主郭中央の遺構と遺物

### （1）概要（第16図）

主郭中央部の調査は、平成10年度に町単独で行った。そのため今回の補助事業の対象外であるが、今回の調査結果と密接な関係があるため、ここに概要を記しておく。

調査は、北から5m間隔にトレンチを7本設定し、トレンチ上に2mグリッドを3～5箇所設定し、調査を行った。主郭中央における土層堆積状況は、⑤トレンチにみられるように、表土の下に暗褐色土層及び褐色土層の二つの層があり（場所によっては三層）、その下には、12トレンチ7層（土壁に伴う生活面）と同様な、締まりのある暗褐色土（場所によってはハードロームを含む橙褐色土の箇所もある）があり、この付近から中世の遺物が多く出土したことから、これが中世の生活面である可能性を考えられる。④トレンチ及び⑦トレンチでは、中世以前の遺構床面と思われるハードテフラ層が確認されたが、これは場所によっては中世以前の遺構をも一部削り、生活面を構築しているためと思われる。①トレンチは、14トレンチと同様に、何層もの整地層の上に生活面を構築している。生活面のレベルは、東西では、第2次調査のトレンチと隣接する箇所では標高745.60～745.85m、そこから30m東のより中央に近い箇所では746.42～746.60mを測り、30mで60～80cm、10mで20～26cmほど上昇する。一方南北では、主郭北側から南側へは、45mで約40cm上昇し、10mで約9cm上昇することとなり、東西よりも南北の方が水平に近いことができる。

なお、第1次調査では、調査終了後⑥⑦トレンチ拡張区にブルーシートを挟んで埋め戻しを行った。

### （2）遺構

遺構としては、礎石建物址のものと思われる礎石3個を確認した。その他にも、何らかの遺構を構成する可能性のある集石群2箇所を確認したが、第1次調査の段階では調査の目的及び準備が不十分であったため、遺構としての明確な位置付けはできなかった。そのため、ここでは集石群として記述し、遺構の一部である可能性を含むという報告に留めておきたい。

#### 礎石建物址

③トレンチ5グリッドで礎石らしき平石を確認したため、グリッドを南に4mほど拡張して調査を行った。締まりのある橙褐色土層上面に位置し、直径約25～40cmの石3個が、180cm（6尺）間隔で並んで確認された。礎石上面のレベルは標高約746.10mを測り、礎石間のレベル差はほとんど認められない。この面から天目茶碗が出土したため、中世生活面の礎石建物址の一部と考えられるが、その規模等については未調査のため不明である。

#### 集石群1（図版6）

②トレンチで確認された。石上面の標高は745.57～745.93mを測る。石の中には、耕作による影響を受けているものと受けていないもの、中世以前の包含層又は遺構に伴うと思われるもの等があるが、調査不足のためわからない。

#### 集石群2（図版6）

⑥トレンチ及び⑦トレンチで確認された。小さな石が集まつた遺構らしき箇所も一部みられたが、未

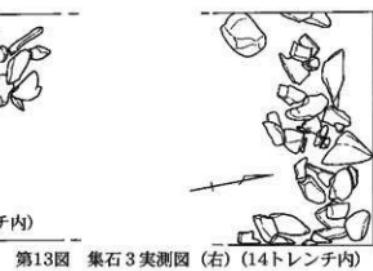
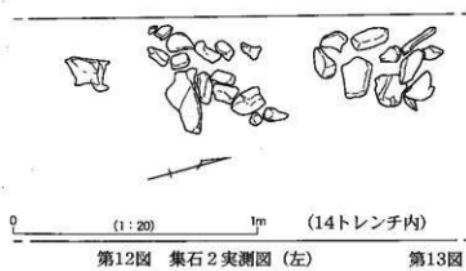
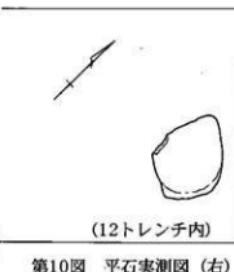
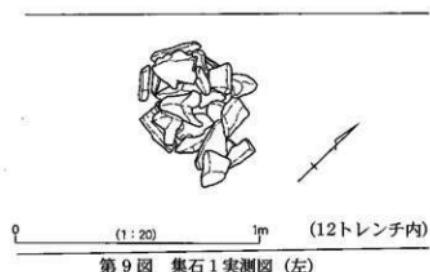
調査のまま埋め戻したため不明である。

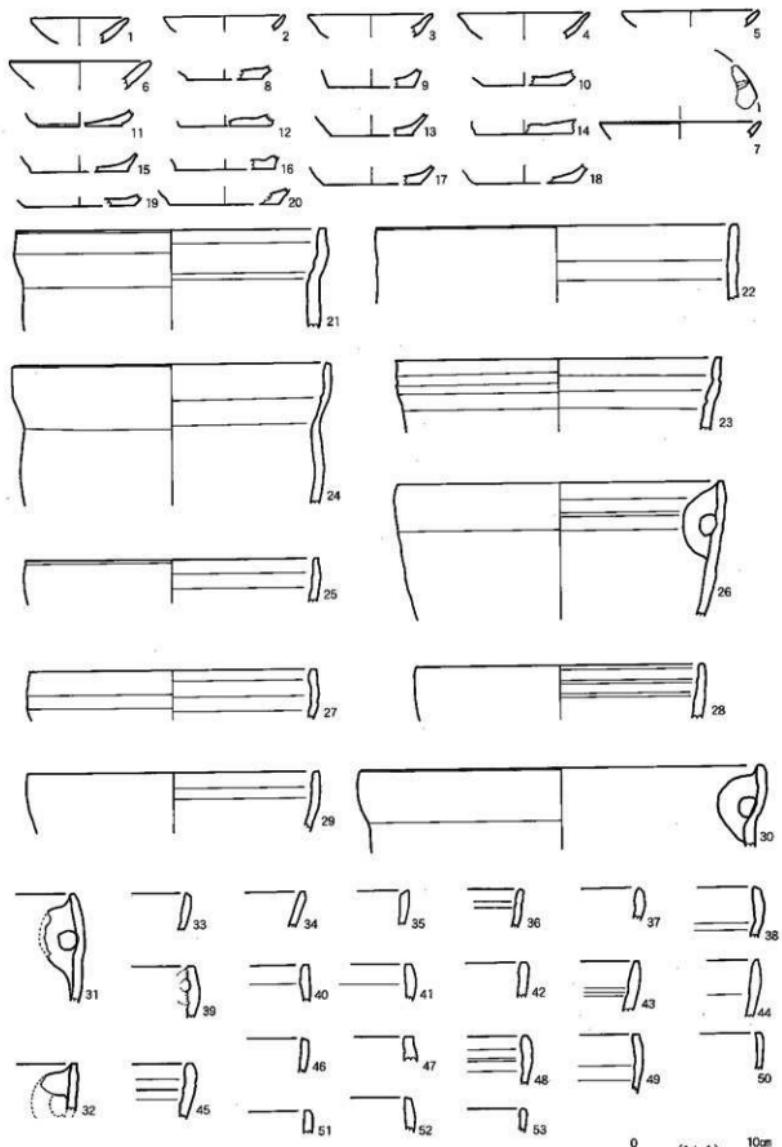
なお、この区域から出土した瀬戸大窯の皿と、③トレンチ拡張区（礎石建物付近）から出土した瀬戸大窯の皿が接合している。

### (3) 遺 物

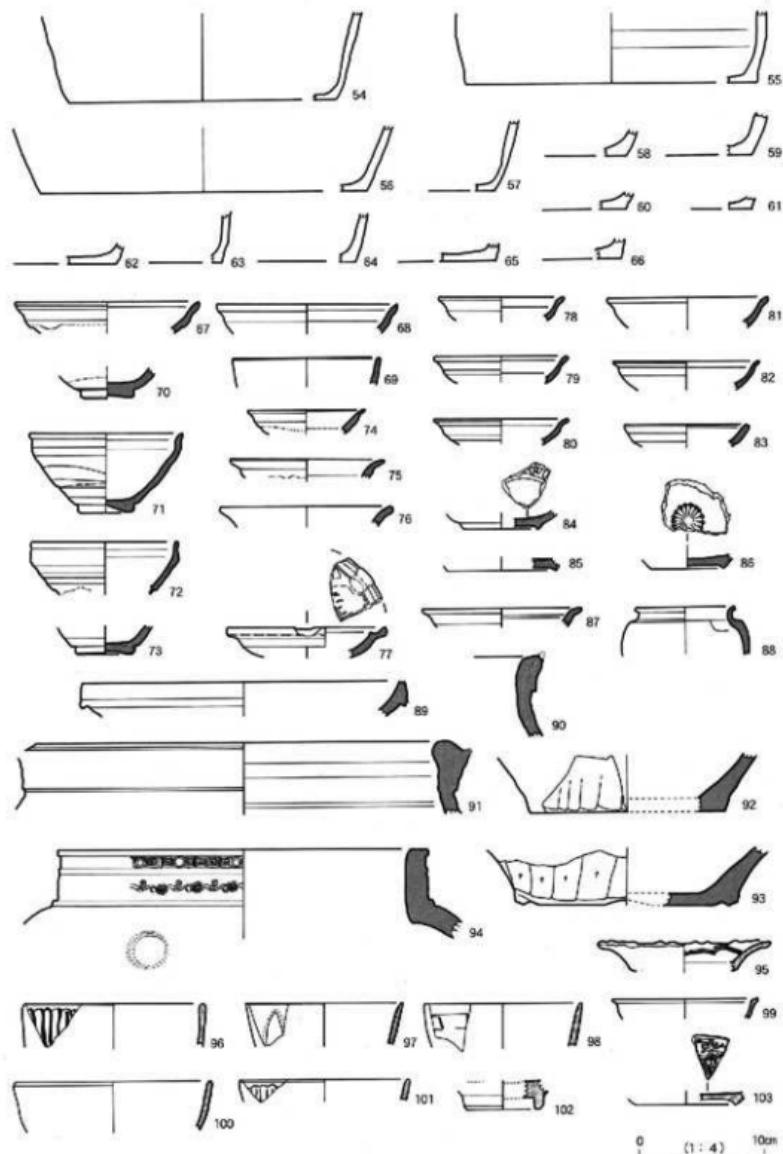
主郭中央部では、上面確認も含め、総数132点の土器が出土した。このうち実測できたものは53点である。内耳鍋は62点出土し、うち20点を実測した。何れも小破片であり、器形・法量等が明確なものは少ない。第17図31は耳部を体部に取り付けた後に、手または布によって付けたと思われるヨコ、ナナメ不定方向のナデがみられる。第18図57は底部であり、外面全体に煤が付着しているが、底から0.5cmまでの間のみ煤がみられない。カワラケは18点出土し、うち12点を実測した。全てロクロ成形であるが、いずれも小破片であり、器形・法量等は明確でない。第17図5は外面に煤が付着しており、灯明皿の可能性が考えられる。第18図68は灰釉平碗、69は灰釉丸碗、70は天目茶碗である。75と76は灰釉腰折皿、77は灰釉鉢皿であり、いずれも15世紀後半のものである。78～82は灰釉端反皿、83は灰釉丸皿で、いずれも瀬戸大窯のものである。84は灰釉丸ノミ皿で、内面にノミによる削り出しが施されている。85・86も灰釉の皿である。86は底部内面に菊の印花文が施されている。92と93は常滑焼の甕の底部である。95は青磁の輪花皿であり、内面に削り出しによる花弁状の模様が施されている。98と101は青磁碗であり、それぞれ外面に削り出しによる雷文と蓮弁文が施されている。103は青花の皿であり、内面底に染付による模様が施されている。

鉄製品（第19図）は11点出土している。1と2は刀子と思われる。3・9・15は釘である。20は棒状の鉄であるが、器種は不明である。21も器種は不明であるが、鍔のようなものである可能性も考えられる。22・23・25は器種不明である。銭貨では永楽通宝（明銭、本来初鑄年1408年）が1点出土している。

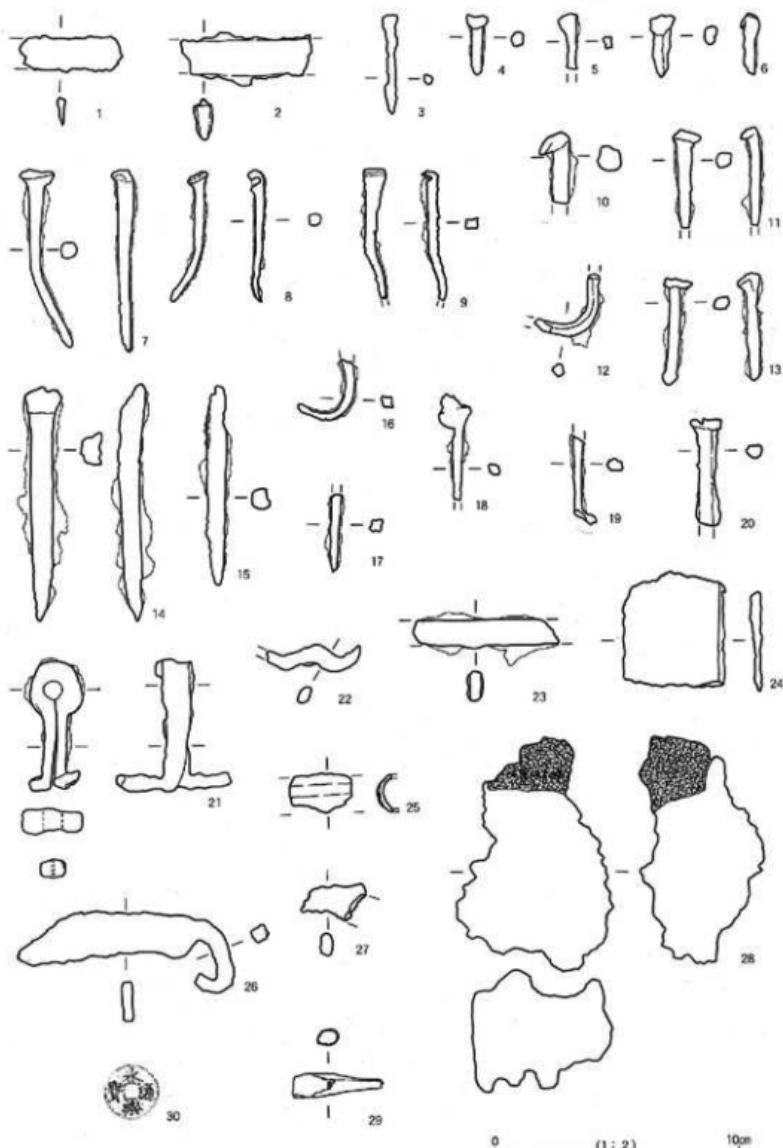




第17図 出土中世焼物実測図1



第18図 出土中世焼物実測図2



第19図 出土金属製品実測図、錢貨拓影図

## 第2節 その他の遺構と遺物

### 1 四の堀周辺の調査（第20図）

三の郭及び四の郭には、その中央約180mにわたって東西に堀が通っている。三の郭のうち、この堀を挟んで北側を通称「かじや畠」と呼んでいる。四の堀は、三の郭と四の郭の間にあるとされるが、現状では確認することができない。今回の調査では、四の堀を確認する調査を、「かじや畠」側の堀推定地にあたる畠において行った。調査地は、東西約12~18m、南北約55mの長方形の畠で、標高はおよそ754.00~755.30mを測る。この畠に幅2mのトレンチを2本設定し（10・11トレンチ）、断面による確認調査を行った。

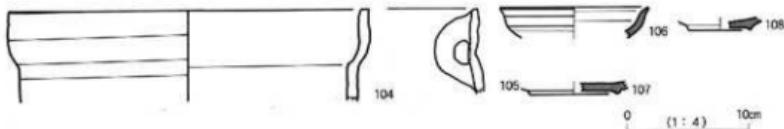
調査の結果、両トレンチの基本土層は、上から、表土、褐色土及び暗褐色土層、黒色土層、テフラ層であることが確認された。このうち黒色土層は、構文～平安時代の遺物を含む包含層であると考えられ、北端部に行くほど厚く（10トレンチ）、中央に近づくほど薄くなる（11トレンチには僅かしかなく、代わりに粘土質の層が何層も存在する）状況がみられる。また、トレンチ東側では黒色土層が無い箇所もみられ、東側高所の黒色土層又はテフラ層を削平して、その土を西側（低所）に盛って、生活面をならしているものと思われる。両トレンチでは、中世の遺物が7点、幕末又は近代の遺物が7点出土した。土層堆積状況や出土遺物から、黒色土層上の2層又は3層が中世の生活面又はそれを削平した層と考えられる。

中世の遺物の内容は、内耳鍋が4点、カワラケが1点、瀬戸美濃系の陶器が2点（壺鉢・縁軸小皿）である。いずれも小破片であり、実測できたものは灰釉縁軸小皿（第18図74）1点のみである。

調査地においては四の堀は確認できなかった。しかし、北側傾斜面には堀らしい痕跡がみられることから、調査地よりも東側又は西側を通っている可能性も考えられる。

### 2 既出遺物

既出遺物のうち、実測できたものを示したものが第21図である。104は調査とは別に、三の堀付近において表面採取した内耳鍋である。105は五の堀東側の御射山平遺跡で確認された内耳鍋である。106~108は上ノ平城跡同様館跡があったとされる日輪寺畠遺跡からの既出遺物で、灰釉の皿である。上ノ平城跡及びその周辺ではこの他に、過去に遺跡詳細分布調査を行った際にも、内耳鍋をはじめとする中世の遺物が多く確認されている。



第21図 既出遺物等実測図

第3表 出土土器観察表

(法量 cm・番号下段は注釈番号)

番号	出土地点	断面	法量	部位	成形・装飾の特徴	文様・調査	備考
1	3次 187	土師質 カワラケ	ロ-(7.6) 高-(2.0)	口縁部	ロクロ成形 口縁部丸み を帯びる	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時30%減量 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色)
2	2次 2006	土師質 カワラケ	ロ-(10.0) 高-(2.0)	口縁部	ロクロ成形 口縁部丸み を帯びる	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.956/6(赤褐色)
3	1次 2235	土師質 カワラケ	ロ-(10.2) 高-(2.0)	口縁部	ロクロ成形 口縁部丸み を帯びる	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.956/6(赤褐色)
4	2次 27 3層	土師質 カワラケ	ロ-(10.0)	口縁部	ロクロ成形 口縁部丸み を帯びる	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.955/4(赤褐色)
5	1次 1119	土師質 カワラケ	ロ-(11.0)	口縁部	ロクロ成形 口縁部丸み を帯びる	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.954/5(赤褐色)少しひねり 黒 明治期
6	1次 1512	土師質 カワラケ	ロ-(11.0) 高-(2.0)	口縁部	ロクロ成形 口縁部丸み を帯びる	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.955/6(赤褐色)
7	3次 569	土師質 カワラケ	ロ-(12.2)	口縁部	ロクロ成形 口縁部丸み を帯びる	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.955/4(赤褐色) 内面に擦
8	3次 141	土師質 カワラケ	ロ-(12.2)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.954/4(赤褐色)
9	1次 1111	土師質 カワラケ	ロ-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.954/5(赤褐色) 外面付着
10	2次 2203	土師質 カワラケ	ロ-(6.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.956/5(赤褐色)
11	1次 1824-1518	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.954/5(赤褐色)
12	1次 1108	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.957/4(赤褐色)
13	1次 1008	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.957/4(赤褐色)
14	1次 1211	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.956/5(赤褐色)
15	1次 1127	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.956/5(赤褐色)
16	3次 592	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.956/5(赤褐色)
17	1次 1201	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.956/5(赤褐色)
18	1次 328	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...普通 色調...0.957/4(赤褐色)
19	1次 320	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.957/4(赤褐色)
20	3次 488	土師質 カワラケ	底-(7.0)	底部	ロクロ成形	外底...ロクロナデ 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時なし 備考...良好 色調...0.957/4(赤褐色)
21	2次 2104	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	体側は直線的に立ち上がる 口縁部はカランク状	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色) 底
22	1次 1213	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	体側は直線的に立ち上がる と出わせら	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.955/6(赤褐色) 外面に擦
23	1次 1317	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	口縁部はくちぎりのクリン ク状に立ち上がる 2周	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.953/5(赤褐色) 全体に擦
24	2次 2605	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	口縁部はくちぎりのクリン ク状に立ち上がる	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/4(赤褐色)
25	1次 67 16	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	内底がざんぐ立ち上がる	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色)
26	2次 2222	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	直線的に立ち上がる	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...サザニ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色) 2周
27	1次 1513	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	ロ-(2.0)	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...サザニ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.955/6(赤褐色)
28	2次 2206	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	口縁部はくちぎりのクリン ク状に立ち上がる	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...サザニ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色) 外面全周に擦
29	1次 1007	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	ロ-(2.0) 「く」の字形に組 合	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...サザニ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色) 外面全周に擦
30	3次 481-485	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部はクリン状	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...サザニ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.955/6(赤褐色)
31	1次 1330	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	ロ-(2.0)	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...サザニ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.955/6(赤褐色)
32	2次 2302	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部ナデ	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色)
33	1次 1115	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部ナデ	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色)
34	1次 1405	土師質 内火鉢	-	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部ナデ	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色)
35	1次 1209	土師質 内火鉢	ロ-(2.0)	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部ナデ	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.957/6(赤褐色)
36	2次 3001	土師質 内火鉢	-	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部ナデ	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.955/4(赤褐色)
37	1次 1318	土師質 内火鉢	-	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部ナデ	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色)
38	3次 1995	土師質 内火鉢	-	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部ナデ	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.954/6(赤褐色)
39	3次 818	土師質 内火鉢	-	口縁部	ロ-(2.0) 口縁部ナデ	外底...ロクロ成形直線カランク 内底...ロクロナデ	粘土...洗削時多く含む 備考...良好 色調...0.953/6(赤褐色)

第3表 出土土器観察表

(法寸 cm : 参考下限は注記番号)

番号	出土地点	種類	法寸	断面	成形・表面の特徴	文様・側面	備考
40	2次 3T	土師質 内耳縁	口-(30.0)	口縁部	直線的なこだらあがる	外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2306						内底・田畠台ナデ	
41	1次 3T	土師質 内耳縁	口-(31.0)	口縁部	口縁部半円形は切厚	外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
1519	3T	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
62	2次 4T	土師質 内耳縁	-	L型脚		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2403	4T	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
43	1次 3T	土師質 内耳縁	-	口縁部		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
1308	3T	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
44	1次 3T	土師質 内耳縁	口-(31.0)	口縁部	口縁内はやや内湾気味に立ちあがり、口縁部中は切厚	外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
1307	3T	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
45	2次 1T	土師質 内耳縁	-	口縁部		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2417		内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
46	1次 H	土師質 内耳縁	-	口縁部		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
1003	H	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
47	2次 2T	土師質 内耳縁	-	口縁部		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2201	2T	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
48	2次 4T	土師質 内耳縁	-	口縁部		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2221	4T	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
49	2次 7T	土師質 内耳縁	-	口縁部		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2705	7T	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
50	3次 14T	土師質 内耳縁	-	口縁部		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
55	1次 14T	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
51	1次 IT 16	土師質 内耳縁	-	口縁部		外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
52	3次 内耳縁	土師質 内耳縁	-	口縁部	口辺部は内湾気味に立ちあがる	外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
53	3次 内耳縁	-	口縁部	L型脚	口辺部は内湾気味に立ちあがる	内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
54	1次 内耳縁	-	口縁部	L型脚	口辺部は内湾気味に立ちあがる	内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
1722他	7T	内耳縁	底-(22.0)	底部		内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
55	2次 7T	土師質 内耳縁	底-(24.0)	底部	底部より凹状する	内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2803	7T	内耳縁				内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
56	2次 2T	土師質 内耳縁	底-(27.0)	底部		外底・ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2230	2T	内耳縁				内底・ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
57	1次 1T	土師質 内耳縁	-	底部		内底・ヨコ、タケナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
1816	1T	内耳縁				内底・ヨコ、タケナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
58	1次 3T	土師質 内耳縁	-	底部		内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
1310	3T	内耳縁				内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
59	1次 14T	土師質 内耳縁	底-(19.2)	底部	底部より凹状する	外底・ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
60	3次 14T	土師質 内耳縁	-	底部		外底・ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
61	3次 14T	土師質 内耳縁	-	底部		外底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
504	2次 内耳縁	土師質 内耳縁	-	底部		外底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
62	2次 2T	土師質 内耳縁	底-(16.4)	底部	底部より凹状する	外底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
2269	1T 2T	内耳縁				内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
63	3次 14T	土師質 内耳縁	-	底部		外底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
638	14T	内耳縁				内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
64	1次 17 T	土師質 内耳縁	底-(24.0)	底部		外底・ハシカ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
1104	17 T	内耳縁				内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
65	3次 4T	土師質 内耳縁	底-(22.8)	底部		外底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
429 - 497	4T	内耳縁				内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
66	3次 14T	土師質 内耳縁	-	底部		外底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
418 - 492	14T	内耳縁				内底・ヨコナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
104	1次 H	土師質 内耳縁	口-(29.6)	口縁部	口辺部はクランク状に立ちあがる 口辺部中は肥厚	外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
3002	H	内耳縁				内底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
105	既出	土師質 内耳縁	-	口縁部	口辺部は内湾気味に立ちあがる 口辺部中は肥厚	外底・田畠台ナデ	紺上・陶和多く含む 焼成・良好 色調・ST65/1(赤茶色)
60-71			口-(30.0)	口縁部		内底・ナデ	

第4表 出土陶器・磁器観察表

(法寸 cm : 参考下限は注記番号)

番号	出土地点	種類	断面	法寸	形状・特徴	文様・側面	備考
67	2次 1T	灰陶	平盤	口-(15.0)	口縁部	六瓣口 1JC後手	ロクロ成形 焼成・一晩器 色調・新白 2.8Mm/1(赤茶色) 民物 2.5T 2.5T(淡黄色) 清潔度割合 2.87/1(淡白色)
2114							
68	1次 3T	灰陶	平盤	口-(15.0)	口縁部	占戸窓 1JC後手	ロクロ成形 焼成・良好 色調・新白 2.8Mm/1(赤茶色)
1302	3T	灰陶	平盤				
69	1次 3T	灰陶	丸盤	口-(12.0)	1JC後手	大環1	ロクロ成形 焼成・良好 色調・新白 2.5Mm/1(赤茶色)
1609	3T	灰陶	丸盤				
70	1次 3T	灰陶	天目茶碗	底-(4.0)	武部	内底口高 1JC後手	焼成・良好 色調・新白 10Mm/1(赤茶色) 内底茶碗 7.5Mm/1(淡黄色)
1331	3T	灰陶	天目茶碗				
71	2次 H	灰陶	大口茶碗	口-(12.0)	人頭2	内底口高	ロクロ成形 焼成・良好 色調・削面 2.5Mm/2(灰白色) 内外底 7.5Mm/2(淡黄色) 口縁内部 2.5Mm/3(青白色) 壁面青白部分 10Mm/3(淡黄色) 高白胎から口縁部までヘラケメリ
2009	H						
72	2次 日	灰陶	天目茶碗	口-(12.0)	口縁部	大底2	ロクロ成形 焼成・良好 色調・削面 2.5Mm/2(灰白色) 灰胎 10Mm/2(青白色)
2005							

第4表 出土陶器・磁器觀察表

(注量cm、番号下は注記番号)

番号	出土地名	種類	形態	法量	附註	分類	時代・器物の特徴	大類・細類	備考
73	1次 II	灰陶 網口直腹	天球形瓶	底-(4.0)	底部	古墳時代 1SC 中央か 1SC 中央	内凹り高台	ロクロ成形	焼成・普通 色調・表面 10%W/2(灰黄色) 線軸 7.5%W/2(褐色) 網目 SW3.6(網目褐色)
74	2次 10T	灰陶 網口直腹	繩目小瓶	口-(3.6)	口縁部	古墳時代 人頭	内凹り高台	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 色調全部分 10%W/1(褐色)
75	1次 4T 3G	灰陶 網口直腹	繩目瓶	口-(2.6)	口縁部	古墳時代 人頭	内凹り高台	ロクロ成形	色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 内外面 6%W/3(オリーブ黄色)
76	1次 5T 2G	灰陶 網口直腹	繩目瓶	口-(4.4)	口縁部	古墳時代 人頭	内凹り高台	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 内外面 6%W/3(灰 オーリーブ)
77	1次 灰陶 網口直腹	瓶	口-(3.6)	口縁部	古墳時代 人頭	内凹り高台 1SC 中央	ロクロ成形	色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 灰陶 SW1/1(灰白色) と SW1/4(暗オリーブ)	
78	1次 4T 4G	灰陶 網口直腹	繩目瓶	口-(6.2)	口縁部	大底 1		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 内外面 6%W/3(オ リーブ色) と 8%W/1(灰白色)
79	1次 3T 5G	灰陶 網口直腹	繩目瓶	口-(1.6)	口縁部	人頭 1		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 内外面 7.8%W/2(白色)
80	1次 6T 6G	灰陶 網口直腹	繩目瓶	口-(1.0)	口縁部	大底 1		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 内外面 7.8%W/2(白色)
81	1次 4T 5G	灰陶 網口直腹	瓶	口-(3.0)	口縁部	人頭 1		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 10%W/1(灰白色) 内外面 5%W/3(オ リーブ色)
82	1次 7T	灰陶 網口直腹	繩目瓶	口-(1.6)	口縁部	大底 1		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 内外面 7.8%W/2(白色) 13%W/1(灰白色) 上接合
83	1次 6T 1G	灰陶 網口直腹	丸瓶	口-(0.2)	口縁部	大底 2	口縁部面取 り	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 内外面 5%W/2(白色)
84	1次 7T	灰陶 網口直腹	丸ノミ瓶	底-(6.0)	底部	大底 2	付高台は断 面逆三角形	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 10%W/1(灰白色) 内外面 7.5%W/3(オリー ブ色)
85	1次 4T 3G	灰陶 網口直腹	瓶	底-(8.8)	底部	大底 2	付高台	ロクロ成形	焼成・普通 色調・表面 5.2%W/1(灰白色) 内外面 7.8%W/2(白色)
86	1次 7T	灰陶 網口直腹	瓶	口-(5.2)	口縁部	大底 2	付高台は断 面逆三角形	ロクロ成形	焼成・普通 色調・表面 5.2%W/1(灰白色) 内外面 7.8%W/2(白色)
87	2次 22T	灰陶 網口直腹	丸瓶	口-(1.0)	口縁部	大底 4 前手		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰黄色) 内外面 9.4%W/1(灰白色)
88	2次 3T	灰陶 網口直腹	瓶	口-(8.0)	口縁部	古墳广 または大底		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 5.1%W/1(灰白色) 陰刻面有り
89	2次 22T 19層	網目 測量器	瓶	口-(6.6)	口縁部	人頭 2		同軸 台ナ デ?	焼成・普通 色調・表面 7.5%W/1(灰白色) 内外面 9.4%W/1(灰褐色) 口縁部面取 2cm
90	5次 15T	無釉 常滑	瓶	-	口縁部	1SC 前手 か?	表面N字状	同軸 台ナ デ?	新上・泥付有り 烧成・普通 色調・10%W/2(灰白色) 山根N字状に折り返し發見 3cm
91	2次 2T	無釉 常滑	瓶	口-(5.4)	口縁部	1SC 後手 か?	表面N字状 1SC 前手	同軸 台ナ デ?	焼成・普通 色調・5.1%W/1(灰白色) 陰刻面有り 滲着 焼成の折り返し泥付上りで下に3cm 同軸の網眼取
92	1次 12T 22T	無釉 常滑	瓶	底-(1.0)	底部	1SC 後手 か? 1SC 手		焼成・普通 色調・表面 7.5%W/1(灰白色) 外面 10%W/4(暗オリ ーブ)	
93	1次 14T 4G	無釉 常滑	瓶	底-(8.4)	底部			ヘラナダ	焼成・普通 色調・7.5%W/1(灰白色) 外面 10%W/4(暗オリーブ)
94	2次 3T 9T	灰陶 十字底	瓶	口-(39.5) 高-(36.0)	口縁部	1SC 手~ 1SC	肩部2穴	ヘラナダ 巨輪ナダ	焼成・普通 色調・7.5%W/8(褐色) 口縁部外側へウミガキ後首次のスカ ンプ
95	1次 11T 1G	輸入 青磁	輸入瓶	口-(1.0)	口縁部	鉢形底 1SC 中央 人	口縫が抜打 つ	ロクロ成形	焼成・普通 色調・表面 7.5%W/1(灰白色) 内外面 7.5%W/1(灰褐色)
96	3次 14T	輸入 青磁	瓶	口-(1.4)	口縁部	鉢形底 1SC 中央		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 5.1%W/1(灰白色) 外面 8%W/1(オ リーブ色) 外縁網眼取文
97	2次 8T	輸入 青磁	瓶	口-(1.0)	口縁部	鉢形底 1SC 中央	13~14C 前 手	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 10%W/1(灰白色) 外面 7.5%W/2(オリーブ色) 外縁網眼取文
98	1次 11T 3G	輸入 青磁	瓶	口-(1.0)	口縁部	鉢形底 1SC 中央 人		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 10%W/1(灰白色) 内外面 10%W/2(オリーブ色) 外縁網眼取文による底文
99	2次 8T 38層	輸入 白磁	瓶	口-(11.8)	口縁部	中国V型 11C 後手 か 1SC 中央		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 10%W/2(灰白色) 内外面 5.8%W/2(灰褐色)
100	2次 21T 44層	輸入 青磁	瓶	口-(16.0)	口縁部	鉢形底 1SC 中央		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰褐色) 内外面 2.8%W/2(オリーブ色)
101	1次 6T 7T	輸入 青磁	瓶	口-(14.0)	口縁部	鉢形底 1SC 後 手 か? 1SC 前手		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 10%W/1(灰白色) 10%W/2(オリーブ色) 外面に 所附し泥付文
102	2次 21T	輸入 青磁	瓶	底-(8.0)	底部	1SC 後 手	15~16C 付高台	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰褐色) 内外面 2.8%W/2(オリーブ色)
103	1次 6T 7T	輸入 青磁	瓶	底-(6.0)	底部	1SC 後 手	付高台	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰褐色) 内外面 5%W/2(灰 白色) 網目付部分 5%W/1(暗褐色) 底部内面に給付け模様 あり
104	1次 10T 3G	灰陶 網口直腹	繩目瓶	口-(12.2)	口縁部	大底 1		ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 10%W/4(褐色) 内外面 7.5%W/2(灰白色)
105	1次 14T キシユ	灰陶 網口直腹	繩目瓶	丸瓶	底-(5.0)	底部	付高台は断 面逆三角形	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰褐色) 内外面 7.5%W/3(オリーブ色)
106	1次 14T キシユ	灰陶 網口直腹	丸瓶	底-(7.2)	底部	人頭	付高台は断 面逆三角形	ロクロ成形	焼成・良好 色調・表面 2.8%W/2(灰褐色) 内外面 7.5%W/3(オリーブ色)

第5表 出土金属製品観察表

T=トレンチ G=グリッド

(単位 cm・g)

番号	出土地点	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	1次 7T 2G	刀子	(4.2)	1.1	0.4	(4.9)	刀子の破片。断面は逆三角形を呈している。
2	1次	刀子	(5.4)	1.6	0.7	(13.6)	断面は逆三角形。刀子の中心部とみられる。
3	1次 3T 2G	釘	4.0	0.4	0.4	1.4	基部上端をそのまま叩き潰している。断面方形。
4	2次 1T	釘	2.5	0.6	0.6	1.9	断面正方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
5	2次 1T	釘	(2.3)	0.5	0.3	(0.9)	断面長方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
6	2次 1T	釘	2.5	0.8	0.7	2.4	断面正方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
7	2次 3T 2層	釘	7.1	0.7	0.6	9.7	断面正方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
8	2次 9T	釘	5.3	0.6	0.5	2.8	断面長方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
9	1次 6・7T	釘	(5.3)	0.6	0.35	(3.5)	断面は長方形。脚部は欠損。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
10	2次 4T	釘	(2.9)	1.1	1.0	(4.6)	断面は円形か方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
11	2次 3T	釘	(4.0)	0.6	0.6	(3.3)	下部欠損。断面長方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
12	2次 1T	釘	(3.2)	0.5	0.45	(2.9)	断面正方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
13	2次 1T 5層	釘	4.4	0.7	0.5	4.6	断面正方形。基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とする。
14	2次 8T	釘か?	9.6	1.4	0.8	32.9	釘。断面長方形。基部上端を叩き延ばし頭部とする。
15	1次 5T 5G	釘(合釘)	8.2	0.9	0.7	8.3	頭部造り出しがないもの。断面長方形。
16	2次 2T	釘	(2.9)	0.5	0.45	(2.9)	上部のカサの部分が欠損。断面長方形。
17	2次 2T	釘	(3.2)	0.5	0.45	(2.3)	断面正方形。焼土より出土。
18	2次 4T	釘	(4.4)	0.5	0.4	(4.3)	断面正方形。頭部欠損。
19	2次 4T	釘	(3.7)	0.6	0.5	(1.9)	断面長方形。頭部欠損。
20	1次 4T 5G	棒状の鉄	(4.3)	0.65	0.55	(3.1)	器種不明の棒状鉄器。断面方形で釘の可能性あり。
21	1次 7T 2G	不明	5.4	2.3	0.85	23.5	器種不明。断面上部に長方形の孔があり、下部は両端にそのまま折り曲げている。
22	1次 6・7T	不明	(3.8)	0.8	0.45	(3.56)	器種不明。断面は丸形。
23	1次 6T 2G	板状の鉄製品	(6.0)	1.3	0.6	(12.6)	器種不明の板状鉄器。断面長方形。
24	2次 2T	板状の鉄製品	4.7	4.1	0.6	27.5	用途不明。断面三角形で厚さが一定ではない。
25	1次 6T 3G	円筒型鉄製品	(2.6)	1.6	0.3	(1.8)	断面半円形。器種不明。
26	3次 14T	不明	8.7	1.6	0.4	31.5	器種不明。断面長方形。用途も不明で中世のものではないと思われる。
27	1次 1T 1G	不明	(2.3)	(0.9)	(0.5)	(3.53)	器種不明。断面は長方形。
28	2次 3T	楕円形	9.2	5.7	3.8	248.0	楕円形ととらえた。羽口だらうか十器とおもわれるものが付着していた。
29	2次 10T	キセル	3.7	0.9	0.6	1.1	キセルの吸い口部。

## ・釘について

断面方形鍛造製で「頭部」、「基部」、「脚部」を形成しているものを釘とした。総数は17個体である。「頭部」の沿り出しを観察すると、A~Eに分かれ、Aは基部上端をそのまま折り曲げ、健壮をなすもの(いわゆる折釘)で、今回の調査では出土しなかった。Bは基部上端を叩き潰し頭部とするもの(3)で1個体の出土であった。Cは基部上端を叩き延ばし、折り曲げ頭部とするもの(4~13)で、10個体と一番多く(中世の釘の形状と思われる)、Dは基部上端を叩き延ばし、頭部としたもの(14?)で、1個体の出土であった。Eは頭部造り出しのない合釘が1個体(15)出土している。

第6表 出土銭貨観察表

図版No	出土遺構	銭貨名	ふりがな	本来初鑄年	西暦	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
30	1次 3G	永楽通宝	えいらく	永楽6年(明)	1408年	23	5.5	1.0	1.4	薄く、軽い

## 第V章 まとめ

今回の調査は上ノ平城跡の一部の調査であるため、この調査結果だけで城跡全体を把握することは不可能であるが、ここでは前章までの結果を総括的にまとめ、現段階で考えられる事項について指摘してみたい。

### 主郭周辺について

今回の調査で一番大きな成果は、主郭の現地表面下に、土壘を伴う中世の生活面が確認されたことである。土壘は中世以前の包含層と思われる黒色土層の上に（一部黒色土を削って）構築されている。主郭の北側・西側・南側で確認されたこれらの土壘は、基本的に一つのものと考えられ、少なくとも主郭の三方を囲む土壘であると考えられる。なお、土壘内側の主郭生活面は土壘構築後に整地したものと思われ、その規模は南北45~50mを測る。

主郭西側では出入口遺構が確認され、主郭西方にある二の郭に連絡するものと考えられる。ここからは礎石建物址らしき遺構が確認され、位置的に門の可能性が考えられる。ただし礎石上面は最大で37cmのレベル差がみられる。礎石のレベルからは大量の焼土や炭化物が確認され、さらにその上には人頭大の石が数多く確認された。出土状況から、これらの石は遺構を構成するものではなく、投棄されたものであると推測される。主郭北側で出土した大量の炭化物と合わせて推測すると、出入口を中心とする主郭西側及び北側の遺構が何らかの理由で焼失し、その後、出入口を破壊する等の目的により意図的に石を投棄した可能性が考えられる。

門の他にも礎石建物址と思われる遺構が確認された。遺構の状況や出土遺物から、これらの建物址の礎石は同じ生活面のものと考えられ、いずれも土壘に伴う時期のものと考えられる。なお、いずれの礎石建物址についても、その規模等については不明である。この他に、集石1~3、ピット等の遺構も確認された。

主郭の西には二の堀があったことが確認された。堀上面の幅は6.0~6.8mを測り、緩やかなV字状を呈している。また、堀の深さは二の郭から2.1~2.3mを測り、主郭からでは5m以上の中深さがあったものと考えられる。出土遺物や層位関係から、堀は土壘に伴う生活面と同時期に機能していたものと考えられる。14トレンチにおける遺物取り上げの結果、この土壘に伴う生活面の時期は、15世紀中頃~16世紀中頃と考えられる。

次に、土壘に伴う生活面は大量の土で覆われていることが確認された。8トレンチの土層堆積状況から、土壘に伴う生活面の出入口を破壊した行為と、土壘に伴う生活面を埋めた行為は、少し時間的間隔があるものと思われる。

### 出土遺物について

出土遺物は、そのほとんどが破片である。調査で出土した中世及び近世（幕末を除く）の焼き物で、器種・器形等が判明した破片総数は303点であり、このうち実測できたものは103点である。

在地土器は208点(68.6%)と全体の約7割を占める。このうち内耳鍋が170点(56.1%)、カワラケが38点(12.5%)を数え、内耳鍋が圧倒的に多い。出土した内耳鍋は全て破片であり、器形、口径、底径、器高等の手がかりは曖昧である。実測できたもの46点のうち、33点は口縁部であるが、口辺部までの破片が多く、器形の断定までには至らなかった。時期については、市川隆之氏に見ていただいたところ野村一寿氏の分類によるⅡB類に属するものがほとんどで、15世紀中頃~16世紀前半の遺物と考えられるとのご教示をいただいた。

カワラケのうち実測できたものは20点を数えるが、小破片が多く、器形等の手がかりは曖昧である。全てロクロ成形であり、色調は赤褐色系のものが多いが、白みを帯びた橙褐色系のものもみられる。大きさは比較的大きいものが多い。

国内産搬入陶器は68点（22.4%）を数え、内訳は瀬戸美濃産陶器が53点（17.4%）、常滑焼が15点（4.9%）である。このうち瀬戸美濃産陶器は、14世紀のものと思われる瓶子や仏花瓶もみられるが、多くが古瀬戸末期～瀬戸大窯2期（15世紀後半～16世紀中頃）にかけての遺物である。碗類・皿類等の食器の他に、福鉢や鉢皿等の調理具や茶壺等、様々な器種が出土している。これに対して常滑焼は、器種不明のもの以外は全て甕である。この他に山茶碗の破片が5点出土している。また、これとは別に、国内搬入と思われる瓦質土器の風炉が1点出土しているが、搬入元は不明である。

国外（中国）輸入磁器は21点（6.9%）である。このうち青磁（特に龍泉窯系）が最も多く、削り出しによる蓮弁文等の模様が施されたものがみられる。また、青花皿の破片も1点出土している。

鉄製品では、主郭内部を中心に釘の出土が多い。また、羽口と思われる土器が付着した碗形鉄滓が出土しており、城跡内にある「かじや畠」の地名等からも、城跡内で製鉄を行っていた可能性が考えられる。この他に刀子や器種不明の鉄製品も出土している。銭貨は永楽通宝（明錢）が1点のみ出土した。

#### その他の遺構等について

四の堀については、その存在を確認することはできなかった。しかし、この付近を含めた上ノ平城跡全域及びその周辺からも、主郭とほぼ同様な遺物が確認されたことから、付近一帯が、中世の人々にとっての生活の場であったことが伺われる。

なお、中世以前の遺構・遺物については、その包含層である黒色土層から、縄文時代早期の土器片をはじめ、古墳時代の須恵器や平安時代（9世紀、10世紀後半～11世紀前半等）の土師器、須恵器、灰釉陶器等の破片も出土しており、一帯は古くから人々の生活の場であったことが確認された。

#### おわりにあたって

ここまで調査結果から考えられる点を述べてきたが、遺構・遺物を総合して考えると、上ノ平城跡は戦国時代（特に15世紀中頃～16世紀中頃にかけて）に機能していた城と考えられる。防御機能としては堀や土塁が存在し、門や礎石建物があったことも確認された。遺物の内容から、臨時的な城ではなく、ある期間日常的に生活していた場所と考えられる。そして、その最終段階において、何らかの理由により一部焼失し、その生活面は埋められたものと推測される。今の段階では、土塁を伴う生活面を埋めた後、再び城として用いたか、あるいは畠など別の目的で使用したかは判断することは難しい。しかし、出土遺物や検地帳の字名などから、少なくとも近世においては恒常的な居住空間としては機能していないかったものと考えられる。また、近・現代における構造改善がほとんど行われていないことから、中世末期の状態を今に残している、極めて重要な城跡であると思われる。歴史的には、今回わかった上ノ平城跡の使用年代は、近隣の福与城跡が文献資料に登場する時期と等しく、位置的にも近いことから、何らかの関係があったものと考えられる。福与城跡の考察も含めて、今後さらに検討していく必要がある。

繰り返しになるが、この結果は、あくまで現段階で考えられる可能性であり、まだまだこれから検討しなければならない多くの課題を含んでいる。調査の結果、これまで考えられてきた上ノ平城跡とは異なる、新しい上ノ平城跡の一端が見えてきた。もちろん、今回の調査結果だけでは、これまでの見解を肯定することも否定することもできないが、一つの考え方だけでなく、様々な角度から上ノ平城跡を考える良い機会になったのではないかと思われる。今回の調査が、今後の城郭調査の一助になるよう、多くの皆さんのご意見、ご批判をいただければ幸いである。

調査にあたっては、県史跡という貴重な文化遺産を調査するには、きわめて勉強不足であり、十分な調査ができたとは言えず、大変反省している。この点、多くの皆さんのご協力を頂き、何とか調査を終了することができましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。特に長野県埋蔵文化財センターの河西克造氏、市川隆之氏、信州大学人文学部の菅本正治教授には、調査現場に何度も足を運んでいただき、大変なご足労をおかけしました。心から御礼申し上げます。

最後に、本事業に多大なるご理解とご協力をいただきました、地元南小河内区の皆様、上ノ平城跡地

域活性化事業委員会の皆様、そして、冬の厳しい寒さの中、作業にご尽力いただきました調査関係者の皆様に、改めて御礼申し上げます。本書の刊行をもって、眞の史跡保護の契機となることを念願しながら結びとします。

#### 参考文献・引用文献（著者名50音順）

- 愛知県陶磁資料館 1997『遺跡にみる戦国・桃山の茶道具』  
安城市歴史博物館 1996『愛知県の中世陶器 濑美・常滑・瀬戸』  
伊那史料刊行会 1976『新編 伊那史料叢書（一）』  
河西克造 1993『中世城館跡発掘調査の方法』  
河西克造 1998『考古学から見た中世の城郭・城館跡』  
上伊那郡誌編纂会 1965『上伊那郡誌』第2巻 歴史編  
上高津貝塚ふるさと歴史の広場 1999『焼き物にみる中世の世界—県内出土の土器・陶磁器を中心にして—』  
国立歴史民俗博物館 1998『陶磁器の文化史』  
小諸市教育委員会 1998『愛宕山城跡』  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1994『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13 塩崎城見山岩他』  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条理遺跡』  
(財)長野県埋蔵文化財センター 2000『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書27 更埴条理遺跡他』  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1 金井城跡他』  
佐久市教育委員会 1991『金井城跡』  
信濃史料刊行会 1974『新編 信濃史料叢書』 第7巻  
瀬戸市史編纂委員会 1969『瀬戸市史 陶磁史篇1』  
瀬戸市史編纂委員会 1993『瀬戸市史 陶磁史篇4』  
辰野町教育委員会 1995『堀の内居館跡』  
帝京大学山梨文化財研究所 1990『シンポジウム 考古学と中世史研究—中世考古学及び隣接諸学から』  
帝京大学山梨文化財研究所 1999『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第9集 特集「中世城館の考古学」』  
常滑市誌編纂委員会 1974『常滑窯業誌』  
豊明市教育委員会 1986『沓掛城址』  
長野県 1935『史蹟名勝天然記念物調査報告』第16集  
長野県教育委員会 1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5』  
長野県教育委員会 1976『長野県指定文化財調査報告 第7集』  
長野県教育委員会 1983『長野県の中世城館跡—分布調査報告書—』  
長野県史刊行会 1987『長野県史』通史編 第3巻  
真壁町教育委員会 1998『真壁城への誘い』  
日本中世土器研究会 1990『中近世土器の基礎研究VI』

- 日本福祉大学知多半島総合研究所1994『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』
- 福島県教育委員会 1992『東北横断自動車道遺跡調査報告書15 木村館跡』
- 水窪町教育委員会 1995『高根城 II』
- 箕輪町教育委員会 1997『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』
- 箕輪町教育委員会 1999『上ノ平城跡』－平成10年度第1次試掘調査調査概報－
- 箕輪町教育委員会 2000『本城遺跡』
- 箕輪町誌編纂委員会 1986『箕輪町誌 第2巻 歴史編』
- 宮坂武男 1998『図解 山城探訪 上伊那資料編』

## 付 編

### 上ノ平城跡の変遷と虎口の破壊

長野県埋蔵文化財センター

河西 克造

#### 1. はじめに

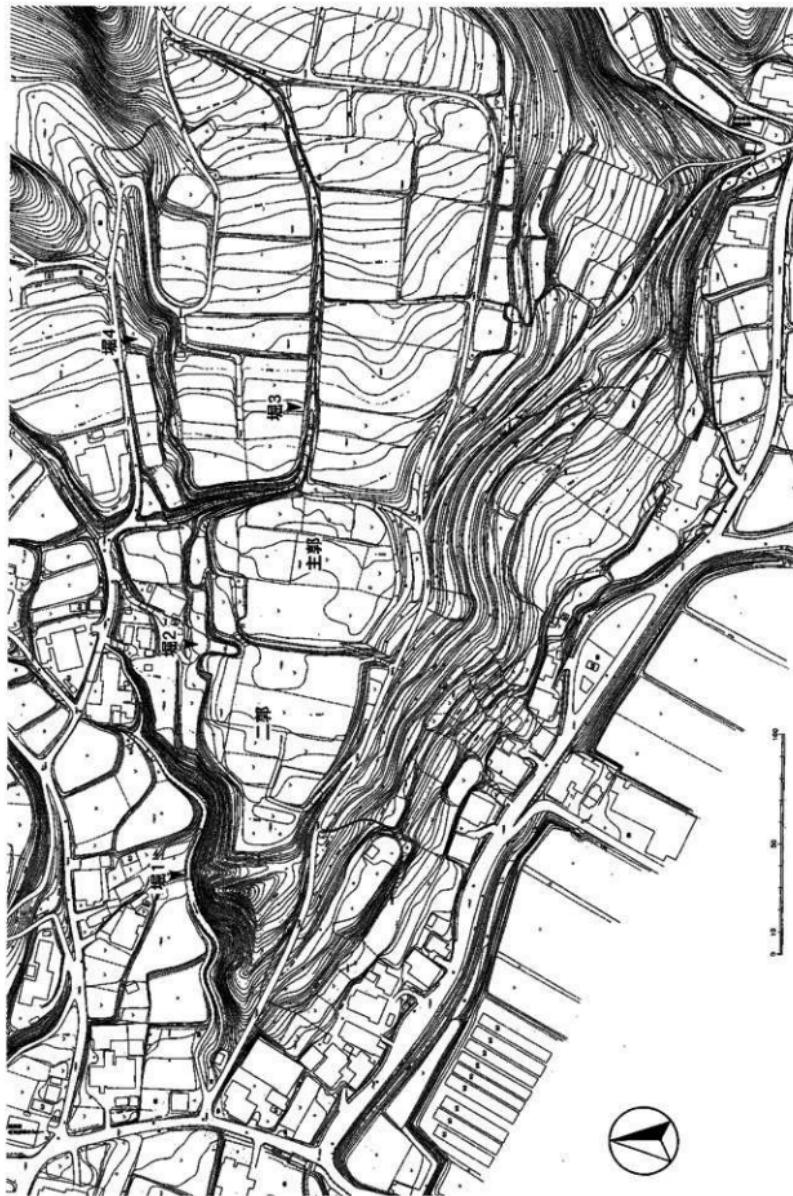
上ノ平城跡が位置する伊那谷は、諏訪湖から流れ出す天竜川によって形成された河岸段丘が発達した地域であり、この河岸段丘上には数多くの中世城館跡が分布している。戦国期に武田氏が拠点的城郭として築城した伊那大島城跡に代表されるこれら城館跡は、天竜川に面した崖と天竜川に流下する河川で浸食された崖を自然の防御として巧に利用しており、河岸段丘の先端に主郭を置き、堀切りで画されて曲輪が並列する縄張りを示すものが多い。伊那谷でも特に伊那市西春近では、構造的に酷似する城館跡が極めて近接して分布しており、最近の調査では各城館跡が水田（耕地）や集落などと密接に関連性をもちつつ、各々が有機的に機能したことが推測されている（註1）。信濃では、伊那谷のほかに田切り地形が発達した佐久盆地も城館発達地域として捉えることができる。これら2つの地域の城館跡には、伊那大島城跡や佐久金井城跡のように、段丘の最前端部に主郭を築き、堀で区画された曲輪が半円形に配置する求心構造のものと、佐久大井城跡や小諸耳取城跡のように不規則に曲輪が配置する非求心構造のものとに分類されるが、①主郭以外に土塁などの防衛施設の付設が希薄である点、②城郭の外縁部が不明瞭な点、で共通している。周辺との比高差などから集落的要素が強く、居住機能を具備した城館と捉えることができる。縄張り構造が示す求心性の問題とかかる城館跡の性格をめぐっては、地表面観察を基礎とした縄張り論と発掘調査で蓄積される考古学的資料とを照合させた検討で明らかになると思われる。

史跡整備に伴う上ノ平城跡の試掘調査では、トレンチ調査という限界性はあったものの地表面観察では全く判読できない貴重な資料が得られた。「城郭」としての上ノ平城跡の実態がうかがえたことはもとより、城跡の存続年代など従来の認識に再検討を迫る結果となった。

そこで本稿では、発掘から得られた考古学的資料をもとに、最近の発掘例を加味して上ノ平城跡を考えてみることとする。なお、城郭施設の名称であるが、今回主な調査対象となった曲輪を「主郭」、主郭先端の曲輪を「二郭」、二郭先端の堀切りを「堀1」、主郭と二郭を画する堀切りを「堀2」、主郭以東の曲輪を「三郭」・「四郭」と便宜上名称をつけて説明する。

#### 2. 現況遺構と埋没遺構

地表面観察で確認される上ノ平城跡の現況測量図が第22図である。上ノ平城跡は天竜川の左岸に位置し、沢川、寺沢川、知久沢によって浸食された段丘地形に立地している。この段丘は通称御射山平から西方（天竜川方向）に向かい舌状にのびており、最も標高が高い城域東端と段丘先端とでは約30mの比高差がある。城郭施設は東西約290mの広範囲で確認され、段丘先端には豊土塁を伴い段丘を分断する大規模な堀切り（堀1）が掘削されている。この堀切り以西には主たる曲輪が存在しないことから、城域の西端を意味するものと理解される。上ノ平城跡を構成する曲輪は、堀1以東に展開している。上ノ平城跡の中核をなす主郭は、ほぼ正方形を呈し城域の中央や西側に位置する。発掘調査時の地表面観察で北側と東側（痕跡）に土塁が確認されているため、主郭の最終段階は土塁に囲まれた構造であったと考えられる。主郭西側には切岸直下の堀切り（堀2）を画して二郭があり、曲輪の配置から主郭と



第22図 上ノ平城跡 現状測量図

二郭が主郭部を構成していたものと考えられる。主郭背後は東方に向かい緩やかに高まる地形で、主郭から離れるほど曲輪の標高が高くなる状況を示している（註2）。ここには段丘中央を堀切り（堀3）が横断しており、南北に2分される城域には広大な曲輪が階段状に展開している。南北方向の堀切り（堀4など）は、尾根上では不明瞭なもの斜面部で確認できることから、各曲輪は南北方向の堀切りで分断されていたものと推測される。さらに、堀3が北方へ屈曲する部分が城域の東辺と推測されるが、遺構や地形的差異で城郭の縁辺部を捉えることが困難で、段丘先端から離れるに従い施設が不明瞭となる伊那谷の城館跡特有の姿を示している。次に曲輪に付随する防御施設を見ると、主郭には土塁、尾根先端の堀1に竪土塁の付設があるものの、その他の施設では土塁が確認されない。最終段階の上ノ平城跡は、土塁の構築が主郭に限定されており、縄張り的には主郭とその他の曲輪とで構造の差異が明瞭にうかがえる。

地表面観察に残る遺構の形成時期についてである。寛永16年（1639）の『南小河内村御検知帳』（畠方）を見ると、遺跡が立地する字「上の平」の地目は「畑」となっている。地筆の現地比定は困難であるが、17世紀前半には現在の景観が形成されており、主郭・二郭などの曲輪面が耕作地として利用されていたことが分かる。調査では、表土または2期盛土から数点の近世陶磁器が出土したのみであり、14トレンチでは1期整地層出土遺物と2期盛土出土遺物が接合している。さらに主郭に残る土塁や堀切りの遺存状況から、廃城後に耕作などで大きく改変された痕跡ではなく、現地表面を上ノ平城跡の最終段階の姿と捉えることができる。したがって、現況遺構が中世の段階に形成されたものと理解できる。

現在目にできる現況遺構の年代であるが、城郭施設に時代的特徴が認められず縄張りから年代比定は困難である。ただし、尾根を分断する大規模な堀切り（堀1）とこれに伴う竪土塁などは戦国期城郭の様相を示すことから、最終段階を戦国期と捉えられる。

次に地表面下で確認された埋没遺構（註3）についてである。今回の発掘調査（トレンチ調査）では現況遺構に先行する遺構もしくは整地に関して以下の情報が得られた。

①. 主郭縁辺（1、3、12、14トレンチ）で埋没した土塁が確認された（第8・11・14図）。

②. 土塁に伴う整地層が確認された。主郭南側の12トレンチでは整地層に伴う礎石が検出された。北側の14トレンチでは推定整地層が薄い炭層で被覆され、遺物が密集して出土し、水平分布を示した。整地層間での遺物の接合や整地層とそれを被覆する盛土出土遺物の接合が見られた（第11図）。

③. 主郭西側の埋没土塁の裾部と堀2（底部付近）から出土した瓦質の風炉が接合した。

④. 主郭西側の土塁開口部（虎口）では門跡と推定される礎石が見つかり、礎石周辺は被熱で赤色化し炭で覆われていた（第15図）。礎石直上には主郭内から二郭に面する切岸に向かい人頭大の礎が多量に投棄されていた（第15図）。

⑤. 曲輪内（3トレンチ拡張区）では、1.8m間隔の礎石建物が見つかった（第16図）。

⑥. 二郭の堀（堀2）は、覆土最上部が意図的に埋められて、上部は曲輪として形成されている。

今回得られた地表面下の情報を総括すると、主郭の埋没土塁、虎口（門跡）、礎石建物、二郭の堀（堀2）が意図的に埋められ、現況遺構が形成されていることが理解できる。

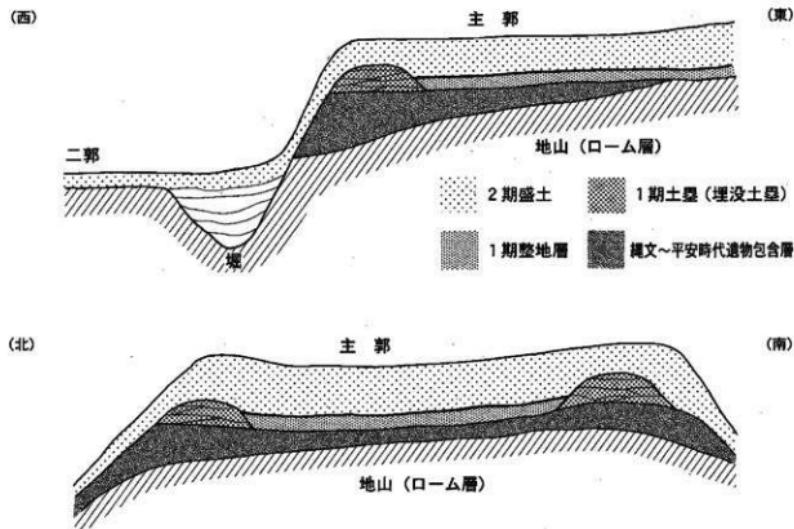
埋没土塁は主郭北側、西側、南側の3方で確認されている。東側は未調査で土塁の存在が不明であるが、現地表面の等高線で土塁の存在が推定されることから、土塁は主郭縁辺を全周する構造であったと推定される。埋没土塁に伴う整地層に限定して中世陶磁器片が密集し、主郭中央部の整地層には礎石建物が構築されている。土塁が開口する西側中央部の虎口は礎石構造の門を伴っており、門は周辺の被熱痕跡や薄い炭層の被覆から火災を受けて焼失した可能性が高い。虎口は門の焼失と同時に多量の礎の一括投棄で破壊されており、意図的に破壊した所謂「城わり（破却）」行為が行われている。さらに炭層の確認地点からすると、焼失範囲は虎口を中心とした主郭北側に限定される。

### 3. 埋没土壘の構造

ここでは、土層断面で確認された埋没土壘の構築方法や整地層との関連性について触ることとする。トレンチでは、ローム層と黒色土を盛り上げた互層状態が主郭縁辺に限定されることと、盛土最上部が整地層上面より上位であることが共通して確認された。筆者は「土もしくは土石混合により、曲輪の縁辺や堀の片側もしくは両側などに構築した防御的施設で、一定空間を区画する役割ももつもの」と土壘を認識している。したがって、盛土最上部と整地層上面との比高差がわずかであるが、これら主郭縁辺で認められた盛土を土壘と理解できる。

トレンチでは主郭のほぼ全域でローム層直上で縄文土器や石器、須恵器、土師器、灰釉陶器が出土する黒色土が確認された。中世以前の遺物包含層であるこの黒色土は、主郭中心部は築城に伴う削平で遺存状況が悪く、土壘直下の主郭縁辺で厚く堆積する。これを模式的に示したものが第23図である。上ノ平城跡が立地する尾根は縄文時代と平安時代に利用（集落か）されており、築城時の主郭造成にあたっては主に最高所の東側を削平し、発生した土を縁辺部の土壘の盛土や整地層に用いたものと思われる。黒色土が土壘付近で厚く遺存することは、土壘構築時には基本的に中世以前の地形に改変を加えず、縁辺部において大規模な削平を行わなかったことを示している。

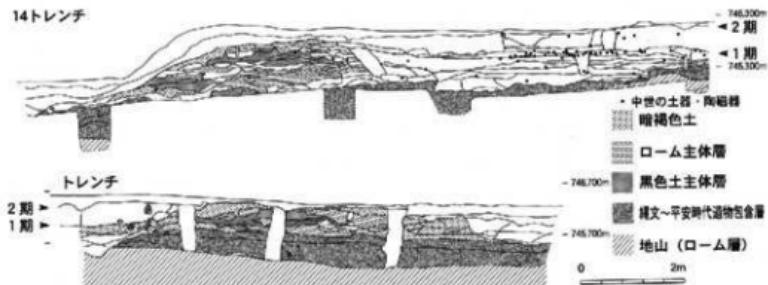
土壘は、①ローム土、②黒色土、③暗褐色土、以上3種類の土を盛土としており、盛り上げにある程度の規則性が見られる。構築状況が最も把握された主郭北側（14トレンチ）と南側（12トレンチ）の土層断面（第24図）から土壘の構築方法を推測すると、以下のようなになる。まず黒色土上層をやや削



第23図 主郭の断面模式図



14トレンチ 埋没土層の断面図



第24図 埋没土層の土層断面図

平し、土壘中央部にローム層を主体とした黄褐色土、周囲に暗褐色土を盛る。次に黒褐色土を盛り上げ、周囲に暗褐色土を盛る。最終的に暗褐色土を盛り上げ土壘が完成する。特徴的なことは、土壘の芯にあたる部分にローム主体層（土壘下部）と黒色土（土壘上部）とを交互に盛り上げていることで、土壘の基礎部分は主郭東側等での地山（ローム層）掘削で生じた土を意図的に用いて、土壘の基礎固めとして嵌ぎ締めていることである。最近の発掘例をもとに土壘の構築方法を、①積き上げ土壘、②嵌ぎ土壘、③版築状土壘、④版築土壘、⑤混合土砂版築土壘、⑥削り残し整形土壘、以上6種類に分類した西ヶ谷恭弘氏の試案によると（西ヶ谷1994）、上ノ平城跡の土壘は「嵌ぎ土壘」に該当し、掘り上げた土砂をモッコ等で積み上げて嵌ぎかためる最も一般的な方法で構築されている。なお、土壘構築と整地層の関係であるが、整地層が土壘盛土最下層に堆積しないことから、曲輪内の整地は土壘構築と同時にしくは土壘完成直後に行われたと思われる。主郭の造成は、まず土壘を構築し、その後に曲輪内を整地する構築順序が採用されたと理解される。

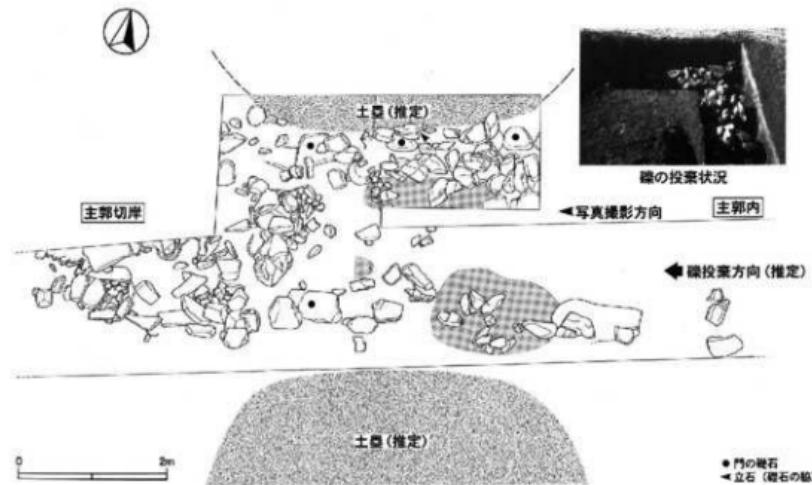
#### 4. 磐石の門を伴う虎口の構造とその破壊

今回の調査では主郭西側縁辺の中央部で多量の礫が検出された。他地点で礫は全く確認されず、礫分布域は特異な様相を呈していた。ここではこの礫の解釈を埋没土壘等との関連で試みることとする。

礫は全体的に人頭大規模のものが多く、なかには径約30cmに達するものもある。容易に持ち運びができないものが散乱する点が特徴で、礫敷造構または礫石建物とは明らかに様相を異なる。人頭大の礫間には、拳大の礫と埋没整地層を被覆する暗褐色土が充填しており、礫が主郭内から縁辺部に向かい傾斜する状況を呈していることから、投棄などによるものとの印象を強く受ける（第25図）。

調査では、この礫が埋没土壘の開口部に分布することと、レベル的に最高位の礫と埋没土壘はともに地表面下約10~15cmで露出することが確認された。虎口の詳細の規模と構造はトレンチ調査のため

不明であるが、土塁幅（下端）約5m、推定土塁開口部幅約3mの平虎口と推測され、礎はその分布から虎口に伴うものと判断される。さらに、礎の下層より3基が1列に並ぶ礎石と、礎石と土塁先端部擦部の間に扁平な石を立てた立石が認められた。石積みの有無で相違するが、礎石と立石は甲府市武田氏館（西曲輪）の北側樹形虎口の2号門跡と酷似する（数野ほか1999）。柱が直接立つ礎石上面のレベルを見ると、東側の礎石と西側の礎石とでは約26cmのレベル差が生じており、曲輪内の礎石が最も高く、曲輪縁辺の礎石は低くなっている。その傾斜は中世以前の遺物包含層である黒色土の傾斜と極めて一致しており、門の礎石は曲輪内から縁辺に向かい傾斜する虎口空間の地形に沿って構築されたことがうかがえる（註4）。礎石周囲の被熱痕跡と部分的な薄い炭層の被覆から、火災等により上屋が焼失し、それと同時に直後に曲輪内から縁辺部に向かい多量の礎が意図的に投棄されたと考えられる。このような類例として、福島県木村館跡がある。木村館跡Ⅲ区3号平場の枡形では、6基の柱痕が残る虎口に礎を投棄した状況が認められており（大越ほか1992）、千田嘉博氏によると虎口に石を擰めてふさぐ事例は宮崎県都城間城跡でも見られているようである（千田1992）。虎口は曲輪や石垣と同様に城郭を構成する重要なパーツであり、城郭において防御的施設または出入口として最も重要な虎口を意図的に破壊し、その機能を停止させることは、織豊期の文献史料に登場する「城わり（破却）」に該当する行為とみることができよう。戦国期における「城わり（破却）」の存在を示す史料はない。文献史料と発掘成果の対比で「城郭破却」の実態を論じた伊藤正義氏は、織豊政権はすでに存在した「城わり（破却）」を対占領地・附属地政策として取り入れたと指摘しており（伊藤1991）、この見解や最近の発掘例からすると、戦国期において城郭の破壊はかなり行われていたものと理解される。ここでは「（戦国期）城郭の全体もしくは曲輪・石垣・虎口など城郭を構成する主要な施設を意図的に破壊した痕跡が見られた場合、織豊期の「城わり（破却）」もしくはそれに酷似した目的をもった行為」との認識に立脚し、虎口の破壊を目的として投棄された礎と理解する（註5）。



第25図 主郭虎口の破壊

## 5. 主郭部の変遷

埋没土壘とそれに伴う整地層の存在や主郭西側での虎口の存在とその破壊など、今回の発掘で得られた資料から、主郭を中心に上ノ平城跡の変遷をうかがうこととする。

### ・中世1期

東から西方に傾斜する地形上に城郭を構築する。主郭は地形的に高まる東側を削平し、縁辺に土壘を構築する。東側縁辺（未調査）では現地表面の等高線で土壘状の高まりが見られることから、土壘は全周構造であったと推測される。これを示したものが第26図である。主郭は土壘が完成した後に曲輪内を造成し整地されている。土壘盛土と整地土は、主郭内や主郭隣接地における地山の削平で生じた土が用いられたと思われる。主郭虎口は西側中央と南側中央の2箇所に存在し、縄張りからすると二郭に面する前者が主要虎口であったと考えられる。主要虎口には6基の礎石で構成された門が設けられる。主郭西側の土壘裾部と主郭西側直下の堀2（底部付近）から出土した瓦質の風炉が接合したことから、堀は基本的にこの段階に掘削され、虎口直下付近に想定される土橋により主郭と西側尾根先端とが連絡されていたものと見られる。曲輪内は整地に伴い礎石建物が構築されている。検出された礎石建物の主軸と主郭の主軸が酷似することから、方形を呈する主郭の形状を意識して構築されている。出土遺物を土層に投影した主郭北側の14トレンチからは整地想定層からカララケ、内耳土器、土壘盛土より内耳土器と青磁碗（15世紀中頃）が出土した。青磁は盛土上層の黒色土からの出土である。土器組成は内耳土器が圧倒的大半を占め、整地層内で接合したものもある。出土遺物と礎石建物の存在から、主郭は居住的機能を有した空間であったと理解できるが、トレンチ出土遺物を1期整地層下位と上層に明確に歧別できないため、1期の存続期間は不明である。主郭北側の整地層で見られた炭層や、主要虎口の礎石周囲で見られた被熱痕跡と炭層から、1期の上ノ平城跡は火災等により焼失し、主要虎口は意図的に破壊される。

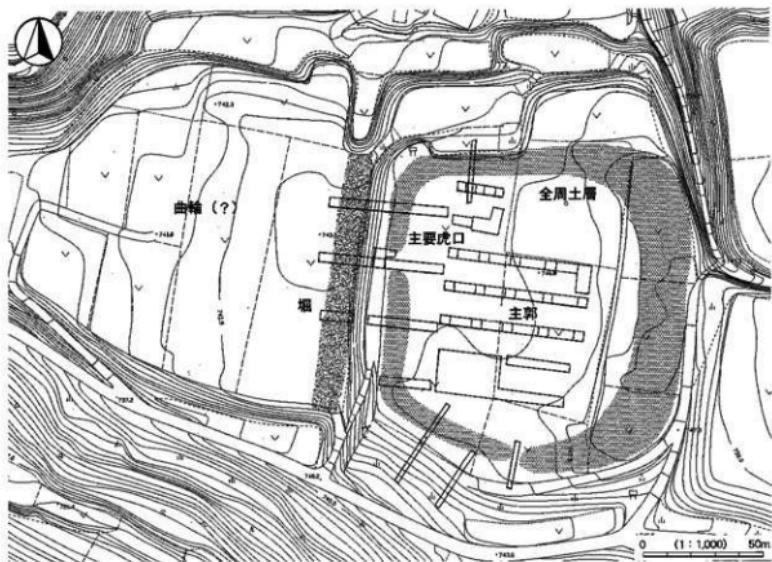
### ・中世2期

現地表面に残る現況遺構が機能していた段階である。1期の主郭が焼失により機能が停止した後に、全周土壘や虎口が完全に埋没する状況となるまで厚さ約40cmの暗褐色土を盛り、北側は約1m、南側は約2.5m外側まで曲輪面が拡張されている。造成後に造成土と酷似する土を用いて主郭縁辺に土壘を構築する。北側と東側（一部）には土壘が構築される。なお、西側と南側については、土壘以外の防衛施設を用いたか、または後世の耕作等で土壘が削平されたかの2点が考えられる。主郭西側直下の堀は、覆土上層に主郭を造成した暗褐色土が堆積しており、2期の主郭造成時に埋められて曲輪として利用されたと考えられる。曲輪面の拡張と理解できる。二郭の造成時期は、未調査のため推測の域を脱しない。ただし、主郭の造成と堀の埋没は同時期に行なった可能性が高く、発掘で大黒I期の丸皿やII期の天目茶碗などが出土していることは、現況遺構が16世紀前半から中頃に形成されたと考えられる。17世紀以降の遺物の出土が極めて少ないことは、基本的に近世以降に改変を受けていないことを示している。

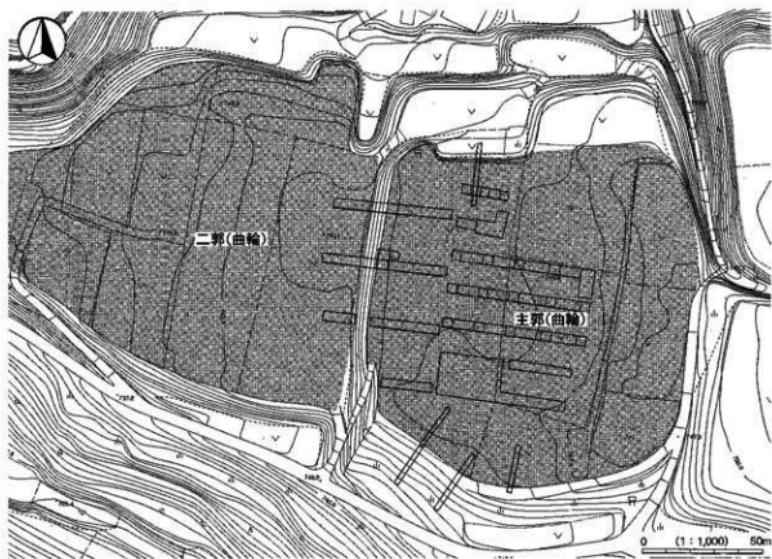
## 6. 上ノ平城の性格と築城主体者（推定）

地表面観察で確認される現況遺構から、上ノ平城跡の性格を考えてみたい。なお、今回の発掘で最終段階（2期）に帰属する遺構（考古学的資料）は未確認であることから、上ノ平城跡の実態解明は今後の発掘に寄与するところが多いことを前記する。

曲輪・堀等に付随する防衛的施設については前述した。上ノ平城跡では主郭と段丘先端の堀以外には土壘の付設がないことと虎口の不明瞭が特徴である。さらに曲輪縁辺等での「折れ」や、斜面部下方に



中世 1 期



中世 2 期

第26図 主郭部の変遷

のびる堅堀がなく、防御的機能が希薄な城郭の姿を示している。縄張り的に見ると、方形で土塁がある主郭と両側が堀切りと接する二郭は「城郭」としての要素を具備している一方、防御的施設が希薄で求心性が弱い主郭東側は、城郭としての認識が困難な場所である。主郭背後が上ノ平城跡に帰属する施設と考えた場合、主郭を中心とした主郭部が城郭として、背後に展開する広大な空間が集落的機能を有した空間と解釈でき、上ノ平城跡は两者とも居住機能を持ちつつ機能分化した異なる空間で構成されていたとの見方ができる。伊那谷には周囲との比高差や防御的施設の希薄さから集落の要素が強い城館跡が数多く分布し、発掘調査では堀で区画されたこれら広大な曲輪から掘立柱建物や堅穴建物、土坑などが多数検出されていることから、防御的施設を持った居住空間と認識される。これらを「城郭」と呼称してよいかは、発掘調査の増加による考古学的資料の蓄積と縄張り調査が進展した現在問われている「城」とは何か?という本質的な問題にまで行きつく。しかし、「城郭」とは、広義にこれを解すれば、軍事的目的をもって構築された防護施設である(鳥羽1944)と的確に述べた鳥羽正雄氏の概念からすると、上ノ平城は「城郭」に間違いなく、「恒常的な居住空間で集落的要素を多分に含む防御的施設」と理解できる。

次に上ノ平城跡の年代と築城主体者について検討してみたい。

上ノ平城については市村寅人氏(市村1935)などの多くの調査・研究がある。市村氏は伊那源氏の祖、源為公が上ノ平に居館を構えたと指摘しているが、該期の遺物は出土していない。今回出土した遺物は大半が小破片で、帰属層位が明確なものは少ない状況であるが、時期判別可能な内耳土器や古瀬戸製品、大窯製品などから、上ノ平城跡の下限年代を16世紀代(16世紀前半~中頃)と捉えることができる。大窯Ⅱ期と思われる丸皿や天目茶碗もあるが、確実にⅢ期に入るものはない。最近の山城の発掘調査では、縄張りと出土遺物との年代観のズレが指摘されている(中井1992)。出土遺物が縄張りより古い様相を示すこの事例は、山城が存続するなかで遺物が良好に残る利用方法と遺物がほとんど残らない利用方法とがあったと解釈されている。軍事的緊張状態でその機能や形が変わる山城ではかかる事例は考えられるが、上ノ平城跡のように防御的施設が付随する比較的恒常的な生活空間と捉えられる遺跡は、「遺物の時期=存続時期」の等式が成立すると理解できる。したがって、上ノ平城の最終段階は大窯Ⅱ期と推定される。

箕輪町では箕輪城と福与城が文献史料に登場するが、上ノ平城は確認されない。そのためこの時期の歴史的事象を『高白斎記』・『妙法寺記』や『二木家記』・『箕輪記』などからうかがってみたい。

信濃では文明年間に在地武士の所領拡大をめぐる相互の争いが激化する。この頃、府中と伊那に本拠とした小笠原氏は対立し、さらに伊那小笠原氏は小笠原政秀(鈴岡城)と家長(松尾城)とで分裂し対立抗争をくり広げていた。また、伊那小笠原氏は笠原、知久氏らとともに諏訪惣領家(諏訪上原城)と大祝家(干沢城)との内紛にも関わり、文明年間の伊那と諏訪は紛争が絶え間なかった。明応年間に分裂していた小笠原氏は統一を成しとげたが、天文17年(1548)に塩尻城で武田晴信と衝突するわけである。上ノ平城の時期は武田氏の諏訪盆地・上伊那侵攻の時期とリンクするため、武田氏侵攻の経過を文献史料等からうかがってみたい(註6)。

天文11年(1542)7月に武田晴信は諏訪に侵攻した。諏訪氏の居城上原城と桑原城を攻撃し、諏訪惣領家を滅亡させたことを皮切りに信濃進出を開始する。晴信は9月25日に連合して諏訪氏を攻撃した高遠頼繼と安國寺門前の宮川で衝突し、頼繼の弟頼宗など高遠軍7、800人が討ち死にした(信史11-187~188)。勝利した武田氏は、翌日に駒井高白斎が藤沢口(高遠周辺)に放火し、福与城の藤沢頼親を攻撃し降伏させた(信史11-190)。また、同月29日には板垣信方が上伊那口に出動し、残兵を掃討した。さらに、天文13年には甲府を発った武田晴信は有賀に着陣し、10月29日に上ノ平城の北方約2.5kmに位置し伊那谷最北部にある荒神山(脊)に陣取っている。11月26日には上原城へ着陣し、12月9日に甲府に帰っている。翌14年4月11日に晴信は甲府を発ち、14日に上原城に入っている。翌

日に上原城を発ち、杖突峠から伊那に攻め入り、18日に頼繼が自落した高遠城に入っている。この際に晴信は上ノ平城の南方約3.7kmに位置する箕輪（福与城）城の藤沢頼親を攻撃したが（信史11-304）、『箕輪記』には福与城にたて籠もった松島・大出・長岡・小河内・福島・木下等百余騎、雜兵千五百人は武田側の攻撃を防いだ記載がある（信史11-305、306）。6月1日には武田氏は今川・後北条氏の加勢を得て、板垣信方が藤沢頼親の救援のために小笠原長時が入った竜ヶ崎城と福与城を攻撃し、両城とも落城している（信史11-307）。なお、6月10日に藤沢氏は武田氏と和睦したが、その際に福与城は放火されている。『高遠記集成』には、武田軍が有賀口より侵入して藤沢頼親等が籠もる福与城を攻撃し、その際に周辺の城も攻めた記載がある（註7）。

以上の状況から、武田氏の上伊那侵攻は高遠城の掌握が重要なポイントとなっており、上伊那最北部の荒神山（岩）も軍事的に重要視していたことがわかる。晴信は諫訪氏を滅ぼした天文11年から14年にかけて、甲府→上原城→杖突峠→高遠城と、甲府→上原城→有賀口→荒神山（岩）の2種類を主な出撃経路として上伊那に幾度となく侵攻しており、天文14年には高遠城を手中に治め、藤沢氏との和睦で上伊那をほぼ掌握したことがうかがえる。武田氏は天文16年3月に高遠城の鎮立を行い（信史11-331）、織田軍侵攻で高遠城が落城する天正10年（1582）年までの期間、同城を拠点的城郭として伊那谷を支配した。

上ノ平城跡の出土遺物は、甲斐武田氏が上伊那に侵攻した時期もしくはその前後の時期を示している。今回のわずかな資料を歴史的事象に結びつけることはことは困難であるが、以下の2つの見方ができよう。

第1は疎を多量に投棄しての虎口の破壊は、在地の武士を越えた戦国大名により為し得た行為との前提から、武田氏が1期の上ノ平城に放火した上で破壊し、その上部に2期の上ノ平城を築城したとの解釈である。第2は武田氏の侵攻などで生じた上伊那の軍事的緊張状態のなかで、在地勢力が1期上ノ平城の廃絶、2期上ノ平城の構築をしたとの見方である。前者は武田氏、後者は在地勢力が城主となる。出土遺物の下限は大窯II期であるが、資料的な限界から1期存続時期と2期存続時期を明確に捉えられなかった。各期の下限年代については、1期・2期とともに大窯段階、または1期が古瀬戸段階、2期が大窯段階であるかは、資料的な限界に起因して推測の域を脱しないが、武田氏侵攻段階の軍事的緊張状態により1期の上ノ平城が破壊されたと理解することはできよう。

本稿では、上ノ平城が武田氏の上伊那侵攻と密接な関係にあることと、大窯II期以降に利用した形跡がないことを指摘し、最終的な判断は今後の発掘調査に委ねることとする。

## 7. おわりに

筆者は平成12年1月に上ノ平城跡の発掘を見る機会を得た。この嚴冬期は天竜川上流から南方に向かい激しい風が吹く。現地では遺跡が立地する段丘上で激しい風に飛ばされそうになりつつ一層寒さを感じたことと、埋没土壘と虎口の破壊、堀の埋没などの発掘成果が一時寒さを忘れるほど強烈な印象を与えてくれたことを鮮明に記憶している。

上ノ平城跡は城郭を構成する基本的要素である曲輪や堀などが存在するものの、土壘などの防衛的施設の希薄さから、積極的に城郭として認定が困難な状況であった。しかし、今回の発掘成果は上記の危惧を一掃するものであり、上ノ平城跡の年代や構造、機能（性格）など従来の認識を再検討する必要に迫られたことは間違いかろう。

今回の調査は、県史跡で史跡整備という関係からトレンチ調査であり、得られた情報は断片的で自ずと限界はあった。その点で、得られた資料から遺構論・遺跡論を展開するには限界があるものの、城郭調査では断片的資料の照合でここまで推測可能であることを示せたと思われる。城郭をどのように発掘するか？、見つかった遺構をどのように解釈するか？、といった城郭の調査法に影響を与えたことが今

回の最も大きな成果であったと思われる。繰り返しになるが、本稿は断片的な資料をもとに遺跡、および検出遺構について解釈を加えたものである。上ノ平城跡の従来の認識を今回の発掘で再検討したが、次世代には新たな資料を加えての再検討を行われることを望みたい。かかる継承を経て徐々に上ノ平城跡の実態が次第に明らかになるものと思われる。

## 註

- 1 現在、伊那市西春近をフィールドとした上伊那教育会による中世城館跡の悉皆調査が実施されており、地表面観察で確認される城館跡個々の構造はもとより、発掘例や地名をもとに集落・耕地との関連性からこれら城館跡群の位置づけを行っている。城館跡を地域史解明の資料として位置づけ活用する意図をもった調査として意義深いものとして評価される。
- 2 上ノ平城跡は曲輪・堀の配置から、天竜川を望む尾根先端の西側が城郭の前面、標高的には高い東側が背後になると思われる。主郭が最高所に位置しない点が特徴であり、かかる様相は河岸段丘先端に主郭を築いた場合、普遍的に生じることである。
- 3 現地表面下で確認された土壘と整地層については、現況遺構のものと区別するために、これらを「埋没土壘」、「埋没整地層」と呼称する。
- 4 レベル差がある礎石の上屋構造については、今後の検討としたい
- 5 伊藤正義氏の「城を壊すことを、中世では破却・破城（城わり）・城割などといった。ごく単純にいえば、破却は上からの強制が、破城には自発的な色合いが、城割には城を整理して適正配備する、というニュアンスがある、といえようか。」（伊藤1993）からすると、上ノ平城跡で見られた痕跡は、「破城」に該当しようか。
- 6 「高白斎記」等の文献史料には、藤沢頼親が存城した場所として「箕輪」の名が登場する。現、箕輪町には天竜川の右岸に「箕輪城」が存在するが、本稿では「箕輪」＝福与城として解釈する。
- 7 『高速記集成』はこの事象を天文16年としているが、天文14年の誤記と思われる。

## 参考文献

- 市村成人1935「上ノ平城址」（『史蹟名勝天然記念物調査報告』第16輯）  
鳥羽正雄1944「城郭の調査および研究法」（『郷土史研究法』）後に鳥羽正雄1980『日本城郭史の再検討』に収録  
信濃史料刊行会1970『信濃史料』第11巻  
信濃史料刊行会1974「妙法寺記」『新編信濃史料叢書』第7巻  
信濃史料刊行会1974「高白斎記」『新編信濃史料叢書』第7巻  
信濃史料刊行会1974「増補二木家記」『新編信濃史料叢書』第7巻  
信濃史料刊行会1974「高速記集成」『新編信濃史料叢書』第7巻  
信濃史料刊行会1974「箕輪記」『新編信濃史料叢書』第7巻  
箕輪町誌編纂刊行委員会1986『箕輪町誌－歴史編－』  
長野県史刊行会1987『長野県史』通史編 第3巻 中世2  
猿島町教育委員会1988『逆井城－第2次・第3次発掘調査報告－』  
笛本正治1990『戦国大名武田氏の信濃支配』  
伊藤正義1991「講和の条件－領域の城郭破却－」『帝京大学山梨文化財研究所報』第13号  
中井 均1992『中世城館跡調査の成果と課題』『月刊考古学ジャーナル』NO. 353  
大越道正ほか1992「木村館跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告15』

- 千田嘉博1992「木村館の構成」『東北横断自動車道遺跡調査報告15』
- 小野義信1992「城館跡等に見られる土壘の覚書－音谷館跡の土壘を中心にして－」『研究紀要』第14号 埼玉県立歴史博物館
- 伊藤正義1993「城を破る－降参の作法②」朝日百科 日本の歴史別冊『城と合戦－長篠の戦いと島原の乱－』
- 西ヶ谷恭弘1994「土壘構築法の編年化試験－関東の発掘成果事例を中心に－」『城郭史研究』第14号
- 小平・井口ほか1996～1998「伊那市西春近における中世城館跡群の研究」『上伊那教育会研究紀要』第18集～20集
- 柴登巳夫1996「上の平城」『伊那谷の城』
- 河西克造1997「佐久地方における中世城館跡の特徴について（予察）」『佐久考古通信』No.69
- 河西克造1998「第7章 第4節 金井城跡検出遺構のまとめ」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 宮坂武男1998『図解 山城探訪－上伊那資料篇－』
- 数野雅彦ほか1999『史跡武田氏館跡IV』甲府市教育委員会
- 原 滋2000「中世城館跡に見る版築土壘－関東地方の事例を中心として－」『研究紀要』18号 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮脇正実「小井戸氏館跡」『信濃中世の館跡』信濃史学会
- 河西克造2001「信濃における戦国大名の城」『織豊期城郭研究会 第9回研究集会資料』
- 藤木久志・伊藤正義編2001『城破りの考古学』



1 トレンチ土層断面



2 トレンチ土層断面



3 トレンチ土層断面



4 トレンチ土層断面



5 トレンチ土層断面



6 トレンチ土層断面



10 トレンチ土層断面



11 トレンチ土層断面



12 トレンチ土層断面



13 トレンチ土層断面



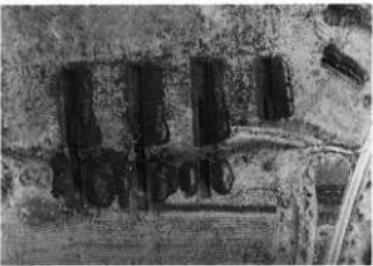
14 トレンチ土層断面 1



14 トレンチ土層断面 2



15 トレンチ土層断面



主郭調査地



主郭南側調査地



四の塚調査地



二の堀土層断面（7トレンチ）



二の堀上層断面（8トレンチ）



二の堀土層断面（9トレンチ）



主郭土堤土層断面(1トレンチ)



主郭土堤土層断面(3トレンチ)



主郭土堤土層断面(14トレンチ)

主郭出入口付近石出土状況  
(2トレンチ・東から)



主郭出入口付近石出土状況  
(15トレンチ・東から)



二の堀石出土状況  
(8トレンチ)





集石 1



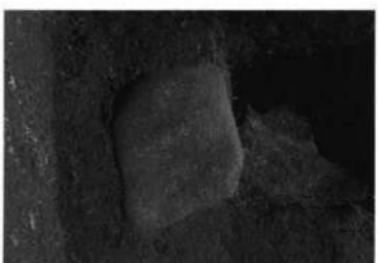
集石 2



集石 3



地下式坑



平 石



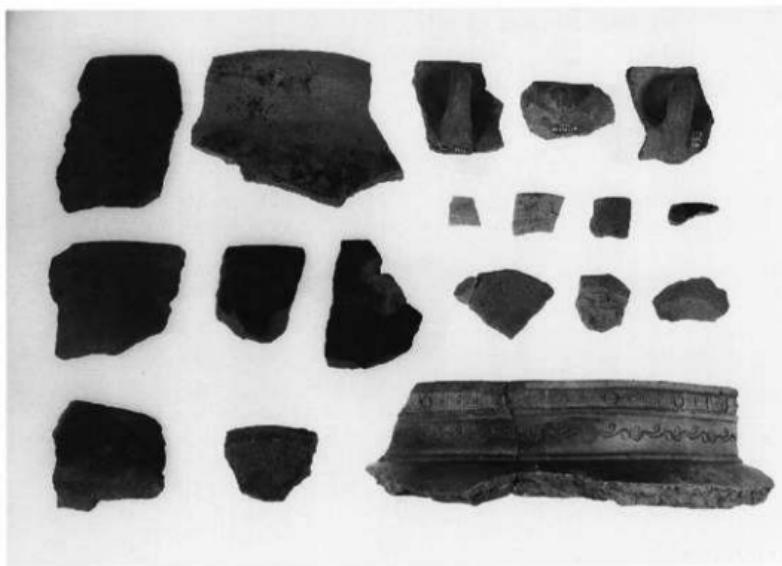
砌石建物址



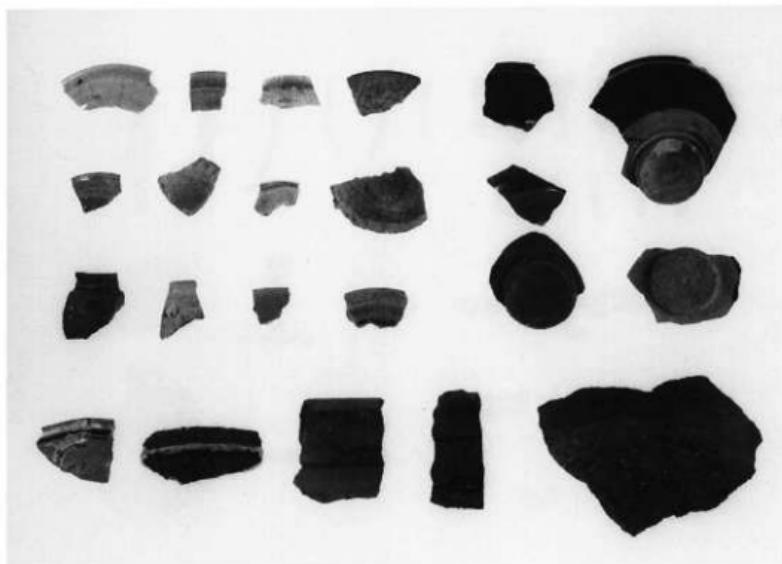
集石群 1



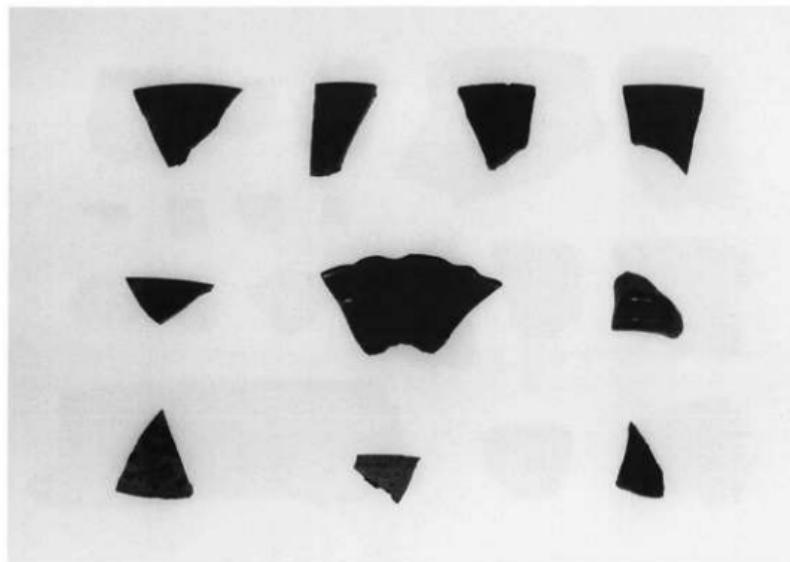
集石群 2



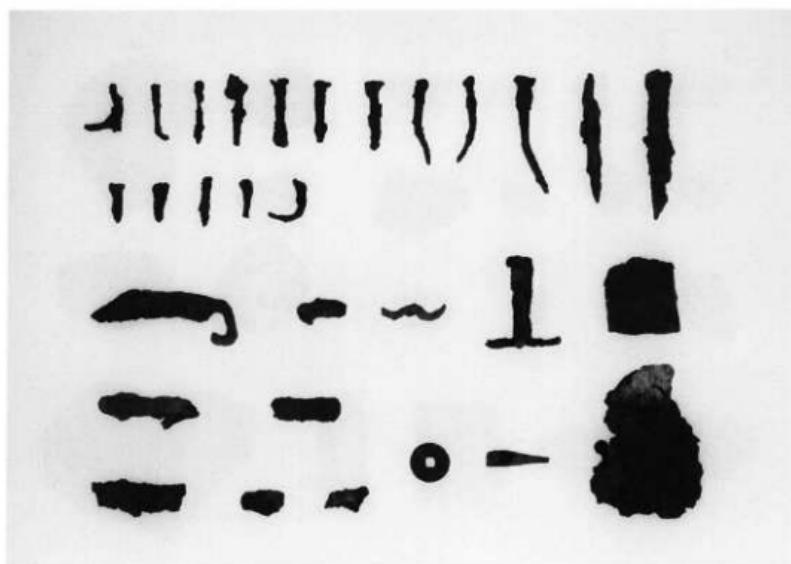
出土中世遺物（在地產土器等）



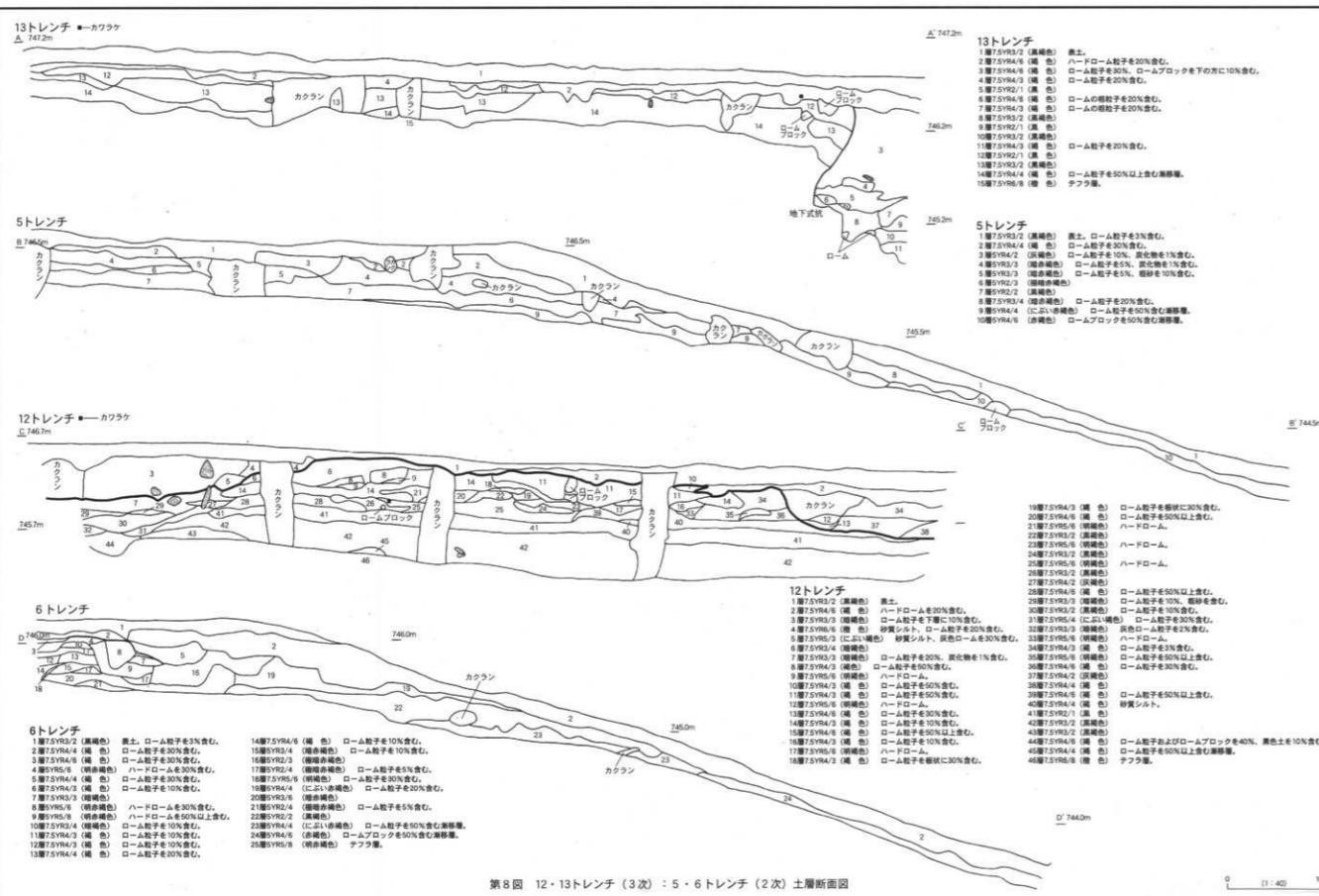
出土中世遺物（国内搬入陶器）



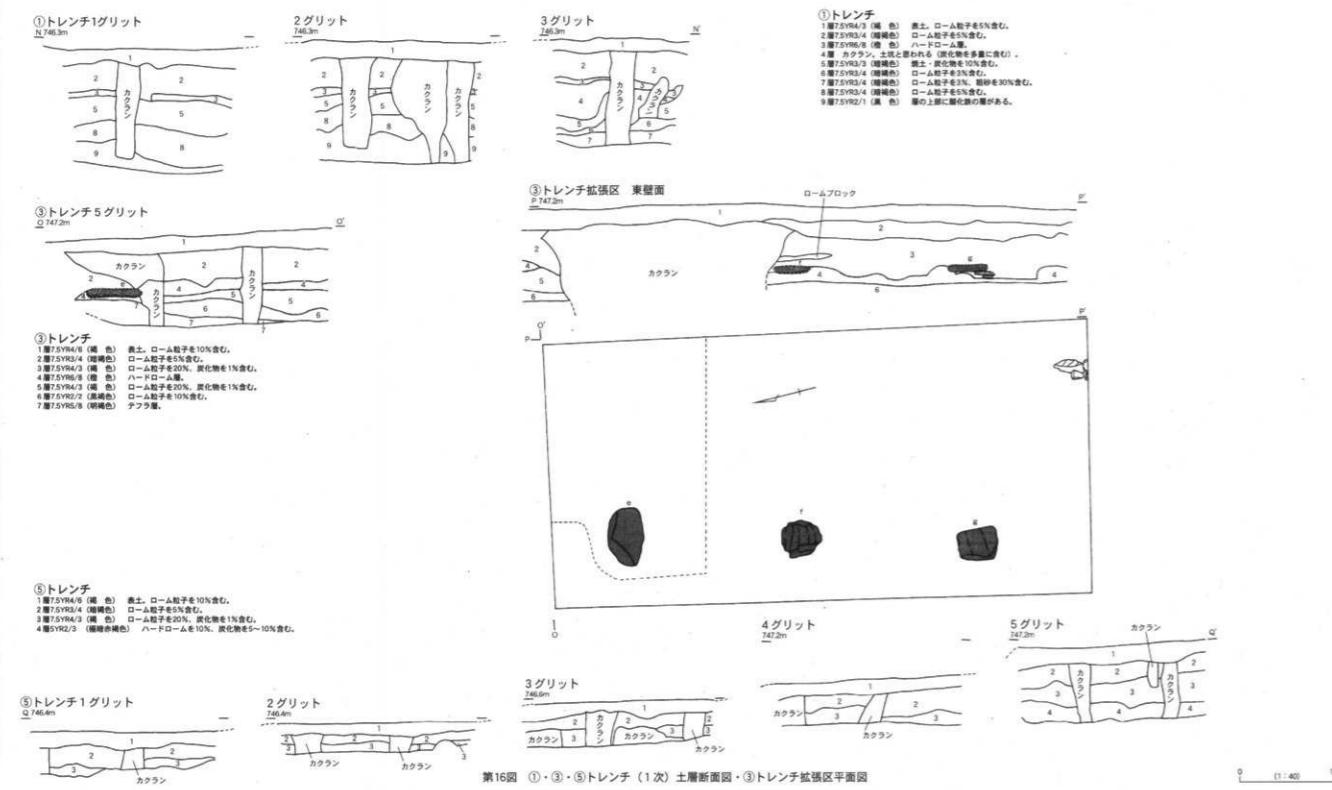
出土中世遺物（輸入磁器）



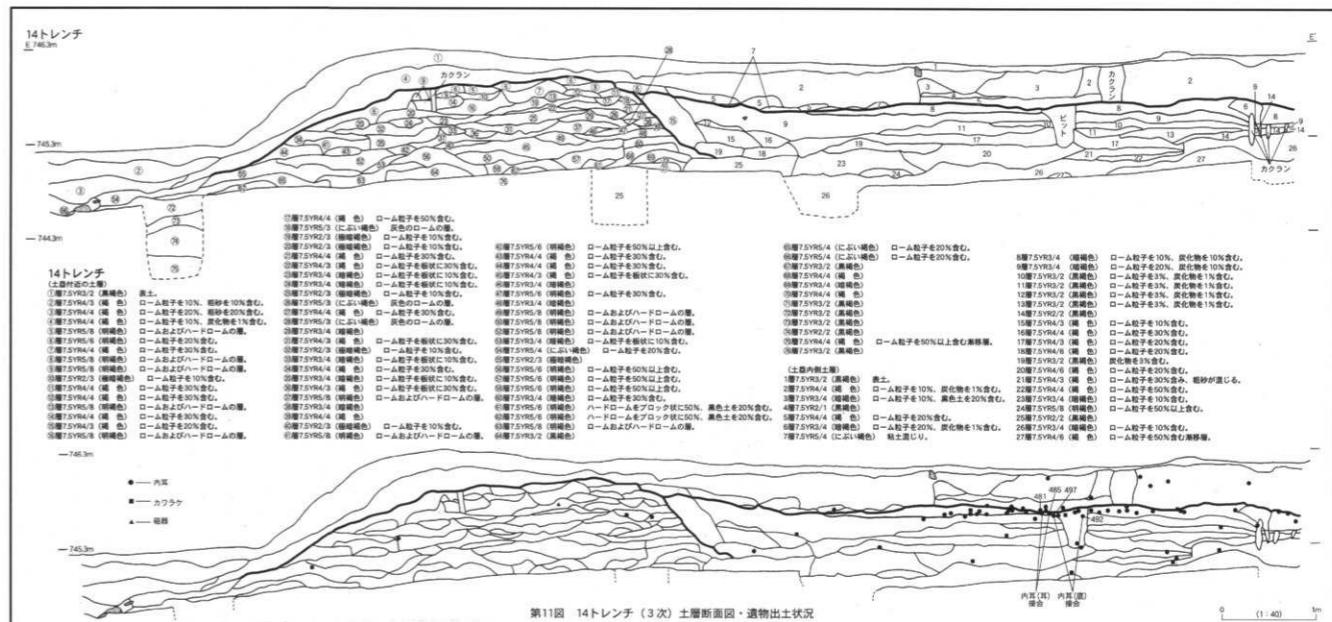
出土金属製品・錢貨



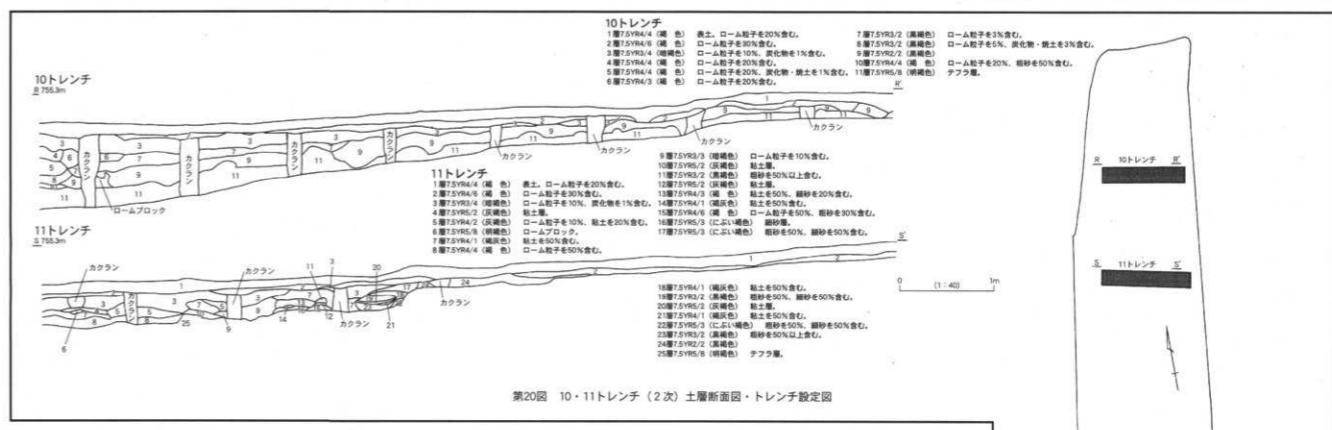
第8図 12・13トレンチ（3次）：5・6トレンチ（2次）土層



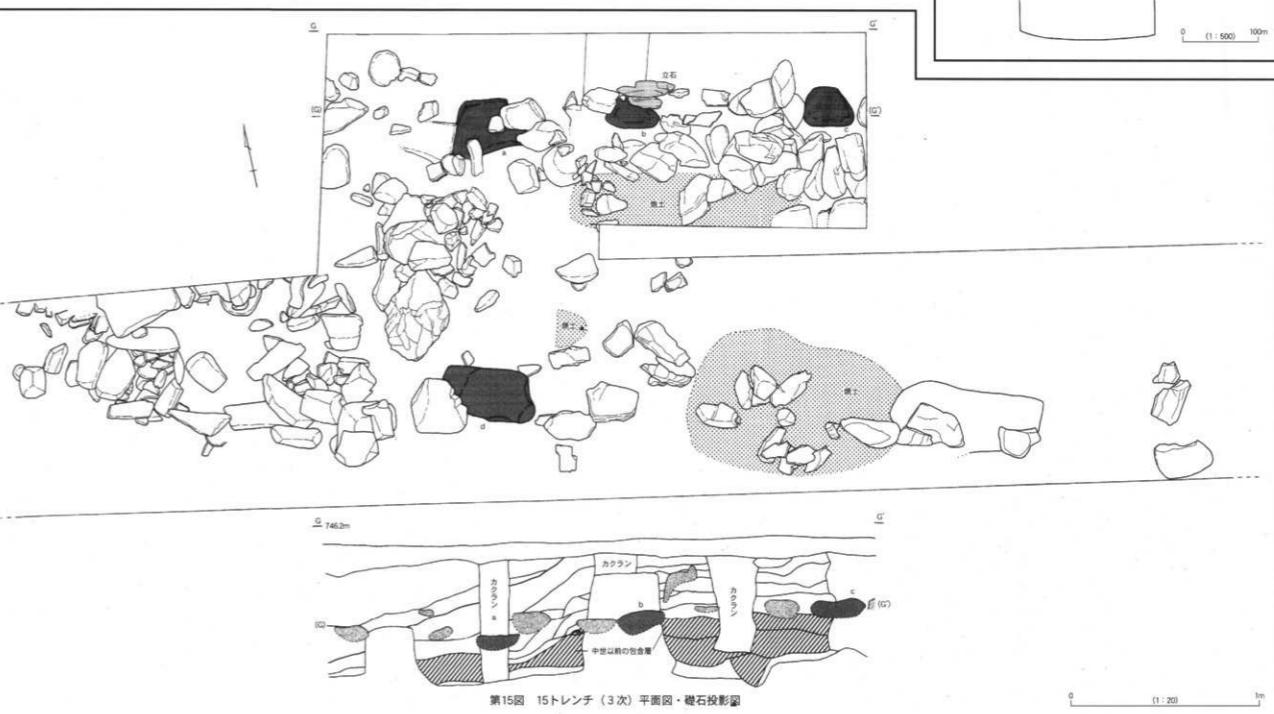
第10回 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳



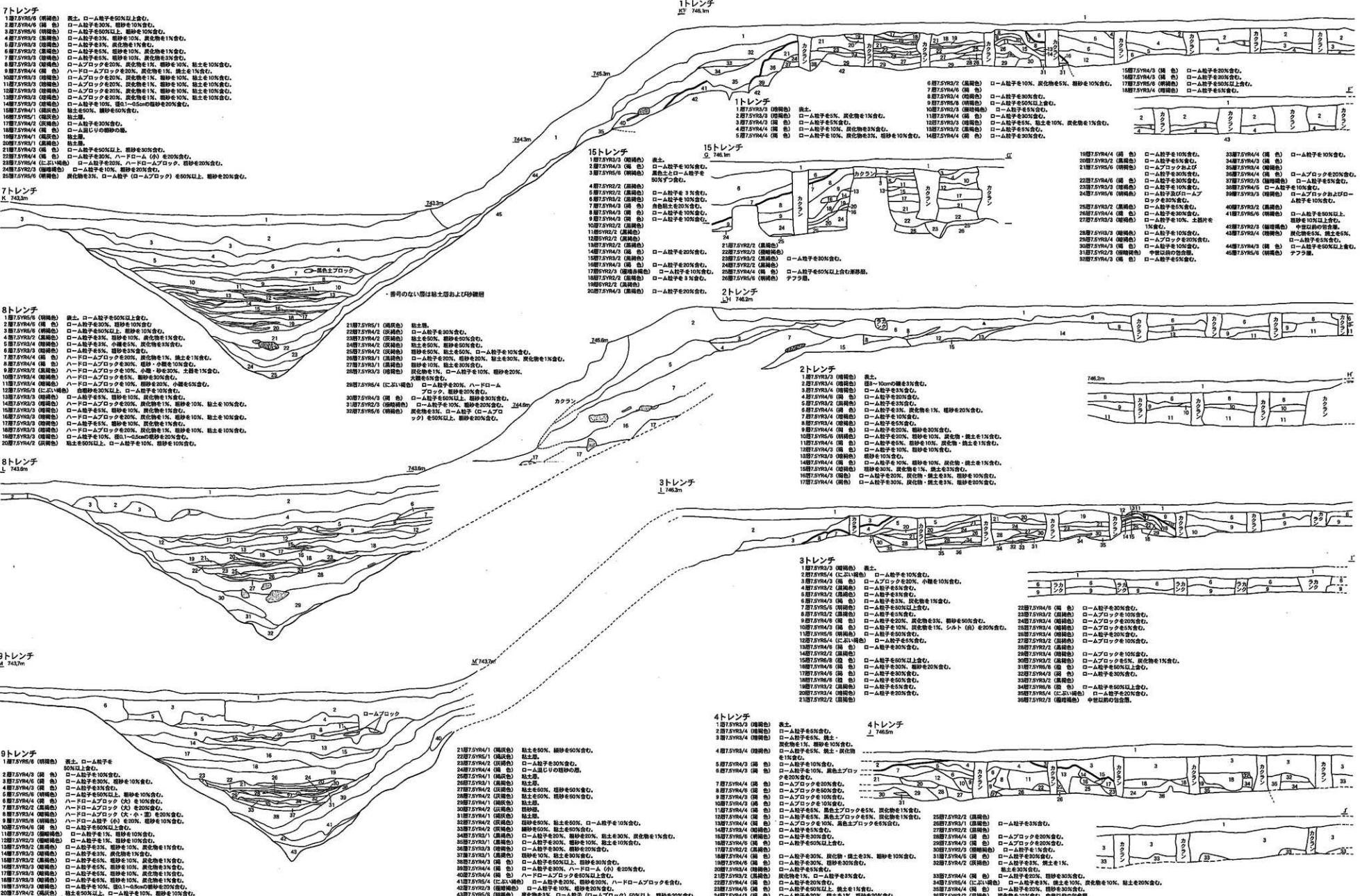
第11図 14トレンチ（3次）土層断面図・遺物出土状況



20図 10・11トレーナ（2次）土層断面図・トレーナ設定図



第15圖：15上1心手（3次）兩面觀一鑽石投影圖



第14圖 1~4 : 3~9 : 15上心重(3次) 大腦斷面

報告書抄録

ふりがな	うえのたいいらじょうせき							
書名	上ノ平城跡							
副書名	平成11・12年度上ノ平城跡発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著者名	松島信幸・寺平 宏・河西克造・柴 秀毅・根橋とし子							
編集機関	箕輪町教育委員会							
所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地 Tel0265-79-3111(代)							
発行年月日	2001年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北。〃緯	東。〃経	調査期間	調査対象面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上ノ平城跡	長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪2,831番地他	20383	121	35°55'42"	138°00'16"	19991028 ～ 20000126	4,500	史跡整備のための基礎資料を得るために
200001017 ～ 20001226								
所有遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上ノ平城跡	城跡	中世	土壘 堀 出入口遺構 礎石建物址 集石 地下式坑	内耳鍔 カワラケ 国内産陶器 輸入磁器 金属製品 錢貨	城跡は、土壘・堀・礎石建物址等の施設を伴い、戦国時代（15世紀中頃～16世紀中頃）に機能していたことがわかった。			

## 上ノ平城跡

平成13年3月21日 印刷

平成13年3月21日 発行

発行所 長野県上伊那郡箕輪町教育委員会  
〒399-4601  
長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地  
TEL 0265-79-3111  
FAX 0265-79-6368

印刷所 ほおづき書籍株式会社  
長野県長野市柳原2133-5